

翻 訳

## 『自由への旅路』

シルビア・スモラー 著\*  
安藤 富雄 訳

### [解説]

著者のシルビア・ウイゼルトール・スモラー (Sylvia Wassertheil-Smoller) は 1932 年ワルシャワ生まれ。1939 年のナチス・ドイツ軍のポーランド侵攻 (第二次世界大戦開始) によって、両親とともにリトアニアに逃れた。1940 年 8 月、リトアニアの当時の首都カウナスの日本領事館で、杉原千畝領事代理から日本通過ビザの発給を受け敦賀港に到着、神戸を経て上海に脱出した。その後アメリカ合衆国へ移住した。現在アメリカ・アインシュタイン医科大学教授 (社会疫学)。ニューヨーク在住。

物語は著者の母親をモデルにして創作されたものであるが、著者の家族の実体験に基づいて書かれている。ストーリーが展開される背景として描かれている第二次世界大戦前のポーランドにおけるユダヤ人社会の生活習慣や宗教的な儀式、ナチス台頭による不安、リトアニアへの逃避行、さらにソ連からの出国時の苦難、アメリカにおける亡命ユダヤ人社会の実態など、あまり知られてない事柄が興味を引く。今回はその第 1 部として、母親レイチェルが過ごしたポーランド南部の村における青春時代を紹介する。

### [第 1 部 母の青春]

#### 第 1 章 ワルシャワ —— 1939 年

1939 年 9 月、灰色の夜明け空に空襲警報が鳴り響いたとき、私は深い眠りについていた。母レイチェルが部屋に飛び込んできて、私をやり起こし、家庭教師のアリーナはもう私にパジャマの上からセーターを着せてくれている。私は寝ぼけて方向もわからぬまま、ぼろきれの人形のよ

---

\* Copyright © by Sylvia Wassertheil-Smoller

うに押されたり、引っ張られたりして部屋の外へ連れ出された。廊下には私たちのアパートを走り抜けようとする人びとが流れとなって、台所の戸口からどっと入り込んできた。互いに押し合いながら廊下を走り、食堂を抜け居間を通り抜けて表のドアから外へ出た。メイドやコックたち、上の階の住人たちも、私たちの部屋を通り道にして、中庭に通じる階段を駆け降り、一階へ避難しようとしていた。建物の一階はどっしりとしたアーチ形になっている。走る、走る、みんなが走っている。食堂の大型ラジオは「ドイツ軍がグダンスクに侵入しました。市民のみなさんは指示に従ってください。これは訓練ではありません。これは訓練ではありません」と繰り返しがなり立てている。叔母のソフィーは、そのときワルシャワの私たちのところに滞在していた。彼女はバスローブの上にセーターを羽織って、私の部屋の外の廊下に姿を見せた。「ガスマスク！ガスマスクがいるわよ！」と叫んでいる。アリーナと私が通路を走って行くと、叔母もついて来た。母と父アレクスもその後からお化けのようなガスマスクを持ってやってくる。階段を駆け降りて、やっとのことで指定された避難場所の入口にたどり着き、人びとの群れの中にもぐり込んだ。みんな黙り込んでいる。飛行機のブンブンという音だけが静けさを破って聞こえてきた。

「あらたいへん、リルカのマスクがないわ！」母が突然大きな声を出した。「アリーナ、あなたのはここにあるわ。この子のマスクはどこへいったの？」

「取りに行ってきます」アリーナが言う。

「いや、ここにいなさい、私が行く」と父が言う。

「ダメよ、建物が爆撃されたら離ればなれになってしまうわ」母は言った。「みんなで行くのよ」おそらく別の建物からここに避難してきたらしい、見知らぬ若い女の人、背が高く美しい人が、優しく母の腕をとって静かに言った。「私が子どもさんのマスクを取ってきますよ。あなたがたは離れてはいけません。どこですか？」

母は私を強く抱き締めて、その人に言った。「ありがとうございます。感謝の申し上げようもありません。なんと勇気のあるお方、なんとという勇気のあるお方でしょう」

その若い女の方は、数分して小さなガスマスクを手に戻って来た。頭上では飛行機がキューンと音を立てて急降下し、爆弾を落としていく。雷鳴のようなゴロゴロという音が遠く町はずれから聞こえてくる。しばらくして警報解除のサイレンが鳴ったので、私たちは黙ったまま防空壕を出てアパートに戻った。食堂ではまだラジオががなり立てている。他のアパートから来た近所の人や子どもたちといっしょに、私たちは大きなマホガニーの箱のラジオの周りに身を寄せて、信じられないというようにたがいに顔を見合わせながら放送に聞き入っていた。

「ドイツ軍がポーランドに侵攻しました。落ち着いて指示に従ってください。警報が鳴ったら、ガスマスクを持って防空壕へ避難してください。道路を通行中に警報が鳴った場合は、最寄りの建物に避難して、解除になるまで建物の入口に留まってください。慌てないように。ドイツの爆撃機はクラクフ、ラドム、チェンストホーバを爆撃しました……」

一日じゅうラジオはニュースと、ポーランド国歌「ポーランドいまだ滅びず、われらはなお生きつづけるかぎり……」を流し、そのあいだに市民への指示をくり返した。

その日警報はさらに二度出された。そのたびに私たちは防空壕へ駆け降りて、爆弾が落ちてくるヒューという恐ろしい音や急降下する飛行機の金属音を聞きながら、息をひそめていた。焼夷弾が空を照らし、遠方には閃光が見える。夜になると市内はまったくの暗闇になった。窓はすべて黒い紙でふさがれ、明かりという明かりは消された。夜間の空襲はないだろう。暗闇ではドイツの飛行機には目標が見えないからだ。

二日後の日曜日に、わが家のコックであるステフチャは、涙ながらに田舎の家族のところへ行って行った。「どうやって帰るの？」母は心配して尋ねる。「ガソリンはないのよ。列車は通っているのかしら？」

「歩いて行きます」ステフチャは気にもしないで答えた。

アリーナも帰って行ったが、彼女の家族は市のすぐはずれに住んでいる。「今夜は家へ泊まるけど、戻って来るわ」と私を抱いて言った。「家族がみな無事かどうか見てきたいの。奥さま、きっと帰って来ます。みなさんのもとから離れませんから」

「ドイツ軍の戦車がワルシャワに接近しています」単調なラジオの声が伝えた。続いて国歌がコーラスで流れてきた。「ポーランドはまだ滅びず、われらはなお生きつづけるかぎり……」

父はポーランドのユダヤ人新聞『ナスズ・プルゼグラド』（我らの視点）を読んで聞かせた。社説は「われわれには戦う準備ができています。英雄的な軍隊だけでなく、一般市民も準備はできている……勝利への決意を揺るがすものはなにひとつない」と宣言している。反対側の紙面はクロードット・コルベールとジェームズ・スチュアート主演の映画『この世は麗し』が封切られると広告していた。ボリュームをいっぱいにしたラジオは、国歌と戦闘的なショパンのポロネーズを交互に流している。

月曜日にはイギリスがドイツに宣戦を布告した。ラジオからはイギリス国歌「神よ、王を救いたまえ」が流れた。サイレンが鳴って対空砲火がパンパンと音をたて、街は噴煙に覆われている。しかし両親はイギリス参戦のニュースを聞いて喜んだ。「さあ、すぐ戦いは終わるぞ。きっとイギリスがやっつけてくれるさ、ヒトラーもこれでおしまいだ」と人びとは語り合った。

『ナスズ・プルゼグラド』の社説は訴えていた。「ポーランドのユダヤ人のみなさん！歴史的なこのとき、私たちは神聖な大義のために、わが祖国のために、名誉のために、未来のために、すべての民族の自由のために、人類の再生のために戦うことを理解しなくてはなりません。ユダヤ人のみなさん！決意し黙して今すぐポーランド軍の隊列に加わりましょう。犠牲は覚悟のうえで勇気を奮い起こし、私たちの軍事的任務を果たそうではありませんか」

49歳だった父は、自分が年をとりすぎていてこの呼びかけに応えるのは無理だと考えていた。また、誇りが高く反ユダヤの気風が強いポーランド軍には、自分の年でもどんな年齢でもユダヤ人は歓迎しないだろうと信じていた。父は第一次世界大戦でピウスツキ<sup>(1)</sup>の軍団に加わって戦い、ついにはピウスツキ内閣の内務大臣の地位にまでのぼりつめた人だ。しかし、少数派のユダヤ人が優遇されたピウスツキ体制下のユダヤ人黄金時代でさえ、軍隊での昇進は厳しいことを知って

いた。それで父はワルシャワに留まる決心をしていた。

水曜日の晩、父の友人で現ポーランド政府の下級官僚をしている人が興奮してアパートに来ると、すぐ国を出よう父に促した。ドイツ軍がワルシャワに近づいてきている。やつらはまっ先に父を捕まえに来るだろう。匿名とはいえ、父アレクスは1933年の国会放火事件の直後ドイツで出版された『ドイツ共和国における反ユダヤ主義』の著者として知られていたからだ。その本はドイツのユダヤ人たちに、ヒトラーの権力掌握には心を許さないよう警告したものだ。アレクスは無名だったが、高名なレッシング教授が序文を書いたため、この本は信頼を得る程度知られていた。しかしベストセラーにはほど遠く、売れ残った本を入れた箱がまだ父の書斎に積まれていた。モシュチツキ大統領、閣僚たち、政府全体がルブリン近くの夏の保養地ナウエンチュフへ逃げている。イギリスが制圧する前にドイツ軍がワルシャワを占領することは明らかであったが、女性と子どもはもちろん安全であると信じられていた。たとえ戦時でもヨーロッパは文明社会であったからだ。しかし父は逃げなくてはならなかった。男たちは射殺されるか強制労働に駆り立てられるだろう。特に反ナチの言論で知られている父は逮捕される危険が迫っていた。その友人はアレクスにただちに逃げるように強く勧めた。

「どうやったら逃げられるの？」母は尋ねた。「ガソリンもないし、車だって手に入らないわ」

翌日は警報のサイレンは鳴らなかった。午後になると、母は私を連れて、父が乗れる列車があるかどうか駅まで見に行った。私を残しておくのが心配だったのだ。通りにはいくつかの家族が荷物を束ねて持ち歩いたり、荷車に積んだりして、たいていは徒歩で郊外に向かっていった。駅ではリトアニアのビルノ<sup>(2)</sup>へ向かって動きだしている満員の列車に、みんなが乗り込もうとして押し合っていた。切符を買うことはとても無理だった。私たちは市の中心部に戻った。

私たちがマルシャウコフスカ通りを横切っていた時、サイレンが鳴り響いた。母は私の手をしっかりとつかんで近くの建物の入口へ走った。「防空壕は地下よ」と言って、誰かが私たちを引っ張って階段を降り、薄暗い場所へ連れて行ってくれた。そこは人がいっぱい汗臭い匂いが鼻をついた。飛行機の爆音とともにヒューという音がした。爆弾が炸裂する轟音を聞くと、今までにないひどい爆撃であるように思われた。その後警戒警報が解除されても、空からはまだブンブンという飛行機のエンジン音が聞こえていた。私たちは防空壕を出た。

夕暮れの空には赤い炎が立ちのぼっていた。地面に大きく開いた穴のそばを通ると、その横には建物が崩れ落ちてうず高く積もっていた。「私の夫が……、夫が……」と言って女の人が両手で頭を抱え込み、体を前後に揺すりながら、瓦礫の上に座り込んでいた。通りはガラスの破片が深く積もっていて、崩れた家の中から男や女、子どもたちが走り出て来る中をかき分けて走って行くと、ガラスの破片が足の下で砕ける。あたりの建物からは火が燃え上がり、煙の匂いが空中に立ち込めていた。男の人がひとり歩道に座り込んで、目の前の道に倒れている馬の頭を泣きながら撫でていた。馬の首には大きな穴が開いて血が流れていた。担架を持った人や看護婦たちが

怪我人を臨時の応急処置所へ運んでいる。

やっとのことでホージャ通りの角を曲がると、私たちの家は元のままの姿で立っていた。母はほっとして涙を流した。

9月7日、父は政府が本当に市内から逃げ去ったと確信して、どんな方法を使ってもワルシャワから出る決心をした。通りの向い側にある警察署へ歩いて行って、車を出すように要求した。署長のイグナツ・ヴィルゴットは父が内閣にいる頃からの知り合いだ。そのとき父といっしょに警察署へ行った母から、私は何年もしてから何度も何度もそのときのやりとりをくわしく聞かされた。母は父のすばらしいお手柄だと褒めた。が、実は自分が家族の運命に主要な役割を果たしたと言いたかったのだろう。今もその場面が絵のように目に浮かぶくらいだ。

警察署の前には、通りに沿って車がずらりと並んでいた。制服を着た運転手たちが磨いている車も何台もあったが、この非常時とは思われない光景だ。ビルゴット署長の部屋の前で、母は黒いスカートの中に絹のブラウスのすそをたくし込んだ。ブラウスはサテンのような光沢がある薄緑色の生地で、胸の輪郭を際立たせている。すばやく口紅を塗り直し、アイシャドウでアクセントをつけて、美しさを引き立たせた。見た目をよくすることは悪いことではない。

2人が署長室に通されると、父は静かだが断固とした口調で言った、「イグナツ、車と運転手が要るんだ」

「ご冗談でしょう！問題外だ、ハフティカ！余分な車はないよ。ガソリンもない。みんなが市から出たがっているんだ」ビルゴットは母の目を追って窓の方へ手を振った。「あれは個人の所有者から徴発してきた車だ。軍が使用する。ハフティカ、きみとは長年の親友だが」と、先ほどよりはやや親しみを込めて話しかけた。「しかし、それはできない相談だ。無理だよ！」話はこれで終わったと言わんばかりに、署長は大きな古ぼけた机の向こうで腰を浮かした。

「私の要求を拒否すれば身のためにならないぞ」父は怒りをあらわにして言った。「これは内務大臣からの命令だ。政府は首都を離れているが、私はそれに加わるよう命令されているんだ。大臣に電話してみろ」

「ルブリンへの連絡線は断たれていることはよくご存知のはずだ」署長は父をきびしく見すえて言った。「市長に電話しよう。彼なら知っているだろう」

署長は受話器をとった。父は決然として机の前に立っていたが、わきに垂れた手がかすかに震えている。母は日頃はけっして汗をかいたことはないと思っていたが、このときばかりは腋の下がじっとり濡れて汗が絹のブラウスにしみ出していた。開いた窓から蠅が一匹入り込んで来て、机の周りをぶんぶん飛び回っている。電話の向こうでかすかな呼び出し音が聞こえている。ついに署長は受話器を置いて、身を乗り出した。

「よろしい」彼は言った。「応答がない。きみの言うことは、はったりかどうかかわからんが、とりあえず信じよう。下の車をどれでもよいから持って行け。運転手もだ。みんな仕事をもらうのを待っているからね」

「ありがとう」と言って、アレクスは背筋をぴんと伸ばし、署長室から出て行った。母もそのすぐ後に続く。

6, 7 人の運転手が外の廊下にたむろしていた。「運転手を選んでくれ」父が母に言う。

事態の進展は急速だ。母は男たちを見た。2 人が近付いて行くと、彼らは背をまっすぐに伸ばした。1 人は背が低くて不愛想に見える。もう 1 人は太ったビール腹で、鼻が細い血管で赤らんでいる。酒飲みだ。みんな車の運転を覚えた農夫たちなのだろう。その中に一人、他の者より背が高くて肩幅の広い、ござっぱりした身なりの男がいた。くせのある金髪で、真面目そうな青い目をしている。ブーツはよく磨かれていて、制服もきちんとアイロンがかけてある。白い手袋もきれいだ。彼がいちばんハンサムだった。

「この人」と母は父に言って、その男に微笑みかけた。

父と母は一時間もしないうちに警察署から戻り、父は小さなスーツケースに持ち物を詰めはじめた。戸棚の小さな金庫にあったお金の半分、1000 ズウォティを自分の財布に入れ、残りの 1000 ズウォティを母に渡した。

「毛皮のコートを持って行くのよ」母は長いアザラシの毛皮のコートを父に手渡ししながら言った。

「馬鹿なことを言うな、私は森へ行くのだ」と父は言った。「毛皮のコートをどうすると言うのだね？それに、ほんとうに寒くなる前には戻って来るよ」

私には「お母さんの言うことをよく聞いて、良い子にしてるんだよ。お父さんはすぐ帰ってくるからね」と言って、父は玄関を出て行った。母が手作りのサンドイッチの袋を持って父の後を追いかける。私は最後のお別れを言うために階段を降りて 2 人について行った。父は私の頭の真上にキスをし、運転手が大型のメルセデスのドアを開けて待っているとき、もう一度母にキスをした。

「それじゃ行こう！」と父が運転手に言った。

「でも、奥さんがまだ……」

「彼女は残るんだ」

「奥さんをここに残して逃げて行くのですか？」運転手は信じられないという顔つきで言った。「私は爆撃が始まってすぐ、妻と子どもたちを田舎の妻の実家へ連れて行きましたよ。自分はワルシャワに留まりましたがね。ここは最悪の爆撃目標になりますから」

父は車のステップに片足を掛けたまま立ち止まった。

「なるほど、なるほど！レイチェル、きみは私といっしょに行かなくちゃ。急いでくれ！君を残して行くなんで、私もどうかしていた。この運転手は私たちよりよほど常識があるぞ」

数分のうちに母は自分と私の衣類を小さなカバンいっぱい詰めた。紐のついた小銭入れ、名前、年齢、住所を書いたものと百ズウォティ札がそれに入っている。

「ソフィーは……？」

「いいえ、私は行きません。男の人がみんな職場を離れて町の周りに塹壕を掘っているんです。私は事務所の面倒をみなくてはならないわ。ここにいても大丈夫よ。アリーナもいてくれるでしょうし、アパートの留守番をするわ」

ひざまずいて私の靴の紐を結んでいたアリーナは、顔を上げて涙を流しながらうなずいた。「奥様、私はここに留まります」

「ソフィー、あなたは来なくちゃ」母は懇願した。「私たちはいっしょじゃなくちゃいけないのよ」

「私は行きません」ソフィーはきっぱりと言った。

母は彼女に腕をまわし、二人はお互いにつよく抱き合った。

「行くぞ」父は母の腕を引っ張った。

それから私たちは大型の黒のメルセデスに乗った。父は運転手とともに前の座席に、母と私は柔らかいクッションの後部座席に座った。私は窓に顔をくっつけて「アリーナ、アリーナ」と叫んでいた。車が角をまがるとき、建物の出入り口で手を振っているソフィーの見納めの姿が最後にちらりと目に入った。プリント柄のドレスの裾を急に吹いてきた風に翻らせたまま、いつまでもいつまでも手を振っていた。

ブレスト・リトフスクに向かって数時間車を走らせると、日が暮れてきた。平原を横切ってはるか地平線まで続いているように見える鉄道線路にさしかかった時、ドイツ空軍のメッサーシュミット戦闘機が一機どこからともなく現れ、鉄道線路の上を低空で横切って行った。

「外へ、外へ！車から外へ出てください！」運転手ピオトルが叫んだ。「伏せて！茂みの陰に！」彼はすでに道路の反対側にある桑の木の茂みに向かって走っている。父は母と私を引っ張って、道路に乗り捨てられた車からさらに離れた別のもっと大きな茂みの方へ急いだ。地面に顔を伏せる。母のからだか私の上に覆いかぶさる。飛行機は車の上に急降下して来て、桑の茂みの上を低く飛んだ。翼の下側に黒い鉤十字が見えた。機体を傾けて旋回したとき、パイロットの顔が見えた。

「死にたくない！死にたくない！」私が泣き叫んだので、母は私を抱き寄せて「シーツ、シーツ」と制した。そのときの恐ろしい記憶はその後何年も私につきまとった。もっと勇気を持たなくては、と思ったものだ。

飛行機は最後にもう1回私たちの上を飛び、すこし上昇すると鉄道線路に沿って東の方へ飛び去った。

「よし、車に戻ってください」ピオトルが茂みの下から起き上がって合図した。「飛行機は私たちには関心がないようです。列車が来たら銃撃しようと待ちかまえているのですよ。とにかく、ここから早く離れましょう！」

ブレスト・リトフスクから数マイルのところ、ピオトルはワルシャワに戻ると言い出した。

「どこともわからないこんなところで、私たちを放り出すなんてことできるの」母は抗議した。

父が 500 ズウォティ出すと言うと、  
「足りません」とピオトルは言った。

「1000 ズウォティ」

「まだ足りません」

結局 1500 ズウォティで話がついて、運転手は私たちをプレスト・リトフスクまで連れて行くことに同意した。これで私たちには 500 ズウォティしか残っていない。

プレスト・リトフスクではある 1 軒の家に住むことになり、私たちと同じような運命の難民家族、ゴールドネクさん一家と同居して親しくなった。母ルージャ、父親サムソン、私より 1 歳ほど年上の娘ルーシャの一家だ。はじめてルーシャを見たのは、彼女が両親といっしょに使っている部屋に私がおずおずと入って行ったときで、彼女は窓辺に座り、鏡に向かって長いブロンドの髪にブラシをかけていた。私はどぎまぎしてしまった。とても美しい人に見えたからだ。私に話しかけることもなくしばらくブラシを動かして、髪の毛をすいたりなでたりしていたが、それからようやく私の方を向いて「なんて名前？」と尋ねた。私たちは友だちのようなものになったが、ルーシャはどんなことでも私よりすぐれ、なんでも知っているようだった。だがその場の難民グループの中では子どもは私たち 2 人だけだったので、いっしょに遊び、両親から聞いた内輪の話も打ち明けた。私にとってこの生活は、つかの間だが楽しくないものではなかった。

プレスト・リトフスクは、次のピンクスへ行くまでのひとときの休憩場所にすぎない。私たちはピンクスで戦争が終わるのを待つのがだった。サムソン・ゴールドネクが自分の家族と私の一家が乗れる大きさの車をうまく見つけてきたので、私たちは心地よくピンクスへ向かった。私には友だちがいる。ワルシャワを出たときよりも楽しい旅だ。

数週間のうち多くの難民がピンクスに到着し、ユダヤ人組織はその人たちをそれぞれの家に住ませるように手配した。ところが 3 ヶ月ほどして、ユダヤ人はこの町から出るのがいちばんいいと告げられた。ドイツ軍が近づいており、ピンクスにはもとのユダヤ人でもういっぱいだというのだ。新しく来たユダヤ人は先に出て行けという。町長が「新しく来たユダヤ人はただちに出て行かなくてはならない」という布告を出した。次の週以後はワルシャワへ送り返すという。しかしワルシャワにはドイツ軍が来ている。すでに初冬でひどい寒さだ。今では運転手もいないし、どうやってピンクスを出て行くのか？そしてどこへ行けばよいのか？ストーリンを通過して北上し、リトアニアのビルノへ行く貨物列車がある。ビルノへ行くほかない。そこへ行けばドイツが打ち負かされるまでおそらく無事に過ごせるだろう。しかしストーリンはロシアの領土で、ロシアはほんの一ヶ月前にヒトラーと不可侵条約を締結したばかりだ。しかも列車は週に一回しか運行していない。私たちはストーリンと向かい合った国境の小さな町を出たところで、やっとのことで 1 軒の農家を見つけることができた。どうして見つけたのか私にはわからないが、ユダヤ人組織がこのような「安全な家」のリストを持っていて逃亡を助けてくれたのだと思う。

ある晩の午前 2 時、父が私たちを起こした。2 台の荷馬車が見つかったのだ。1 台には女と子

ども、もう1台には男たちが乗っていくことになった。「ロシアの国境を越えるのだ。こちらの馬車が止められても、そちらは通過できるだろう」と父は言った。

母は、まだ半ば眠っている私にすばやく何枚も服を着せた。私たちは外へ出て、道路に向かって開いている門の方へ暗闇の中を歩いて行った。そこにはルージャと娘のルーシャがもう待っていた。父とルージャの夫サムソン、そのほか2人の男たちは、馬車のやって来るのを待ちながら、暖をとるために足踏みをしている。暗闇の中で雪が青みがかった灰色のを見た。

ついに荷馬車が音もなくやって来るのが見えた。幌もない馬車に女と子どもたちが乗って毛布にくるまり、2頭の馬に引かれてまず出発した。馬の吐く水蒸気のような息が夜の闇のなかで小さな白い雲をつくる。男たちが次の馬車でついてくる。私はしくしく泣き出した。

「冒険にでかけるのよ」母が言った。「ほらごらん。お馬さんたちなんてきれいなんでしょうね、お首を振って」

荷馬車はストーリンへ通じる国境線を横切り、駅舎の前で止まった。そこは周辺の地域からやっとのことでたどり着いた難民で溢れていて、みんなビルノ行きの列車を待っている。木造の駅舎の中では、丸めた毛布や鞆などの荷物を枕代わりにして人びとが床に寝ている。母は、部屋の中央にある松材の大きなテーブルの上に隙間を見つけ、そこに自分のコートを敷いて、私がすこし眠れるだけの場所を作ってくれた。部屋の片隅では薪のストーブが焚かれていて、火がばちばち音を立てて燃えており、少しは暖かい。

列車がガタンゴトンとストーリンの小さな駅に入ってくると、みんな起き上がり、押し合いながら貨物列車に乗り込もうとした。数分後にはみんな乗って、有蓋貨車に詰め込まれ、列車はビルノへ向かって動き出した。これでもう私たちは安全だ。ナチスからも安全、シベリア送りからも安全なのだろう。でも、どんな運命から安全なのか？いつまで安全なのだろうか？

すべてが偶然で決まる。逃げ延びることも、捕まることも、生も、死も、あらゆることが、ほんのちょっとしたささいなことに懸かっている。偶然の出来事、何気なく発した言葉、ふと目が合ったこと、それが運命の分かれ目となって、どちらも等しくありそうな2つの道のうち、どちらかの道を辿ることになるだろう。

母がああ運転手を選んだのも巡り合わせだったのか？一瞬のうちに決断し、家も、妹も、財産も、ジャルキ<sup>(3)</sup>の小さな村に住む両親さえもあとに残して、ワルシャワのアパートを出てきたが、それも運命だったのか？父がああ運転手の意見を受け入れ、断固として母を連れて来たのは宿命だったのか？初期のわずかな差が長い時間で大きな差になるという力学のカオス理論<sup>(4)</sup>の実例だ。その理論では、アジアで一羽の蝶が羽を動かすと、時間と距離によって増幅され、アメリカではハリケーンを引き起こすという。母がああ運転手を選んだ結果として、私たちはこれからどのような嵐に立ち向かうのか？その嵐の中でどのような避難場所が見つかるのだろうか？「でも、奥さんがまだ……奥さんを連れて行かないと」と言ったああ運転手から、すべては始まったことなのだ。

私の母レイチェルは当時 36 歳。ポーランド南部の田舎のユダヤ人の家庭に生まれ、古いしきたりを守るユダヤ人社会で育ったのです。結婚してワルシャワへ出てきて、第二次大戦が始まったときは、ワルシャワの人たちが「東のパリ」と思い込んでいたあの華やいだ街、そのまっただ中にとつぷり浸かっていたのでした。

私にとって、母レイチェルの物語は彼女がジャルキの両親の家に行った 1918 年ごろから始まります。「私は子どものころはごく普通の子だったと思いますよ」母は私に語ったことがあります。「7 人の子どもがいて、私がいちばん年上でした。まだ 17 歳かそこらで私は目覚めはじめたの……だれでも人生で輝きを放つときがあるでしょう——そう、私はまさにそのときがそうだったのよ」

#### 訳注

- (1) ビウスツキ (1867~1935) ポーランドの元帥・政治家。1893 年ポーランド社会党に加入し、軍事組織を作って武力による独立運動を推進した。第二次大戦でドイツ軍が敗北し、ワルシャワにポーランド政府が作られると、国家主席となり自分が作った軍隊による独裁政治の傾向を強めた。一時引退したが、1926 年クーデターで政治の実権を握り、軍事相に復活。反ユダヤ主義の高まりのなかで、ユダヤ人に対する差別を禁止し、ユダヤ人の大学入学制限の撤廃を勧告した。
- (2) ビルノ 現在のリトアニアの首都ビリニウス
- (3) ジャルキ ポーランド南部の村
- (4) カオス理論 初期条件のわずかな差が長時間後には大きな違いを生じ、實際上結果が予測できない現象。流体の運動や生態系の変動などに見られる。

## 第 2 章 ジャルキ——1819 年

ジャルキの周りの森は雪が解けはじめて、ところどころ地面が濡れていたが、辺りには松の新芽の香りがたちこめて早春の気配が感じられた。土曜日の午後、レイチェルはヘレーナに会うために、苔むした道を歩いていた。ヘレーナは、ひと回りも歳は離れているが、レイチェルにとっては、自分を理解してくれる唯一の親友であった。

2 人が会ったのは、互いの家のほぼ中間にある森のはずれだった。2 人は抱き合い、頭ひとつ背の高いヘレーナは身を屈めてレイチェルの頬にキスをした。ヘレーナのからだには、歯科治療の器具特有の匂いがかすかに漂っている。土曜日の午前中のほとんどを、周辺の村から来るポーランド人農民たちの診療に当てているのだ。農民たちはいつも日曜日の直前になると歯が痛くなるらしい。

「今夜は遅れないようにね。お客さんが来るのよ」ヘレーナは持ち前のしわがれ声で言った。

「できるだけ早く行こう。シャバット<sup>(1)</sup>が終わらないと出られないけど」レイチェルは言った。「お客さんって、だれ？」

「昔からのお友だちよ」ヘレーナは笑った。喉元から赤みがゆっくりと射ってきて高い頬骨まで昇ってゆく。「ヤコブよ。チェンストホーバ<sup>(2)</sup>の向こうから来るの」

「どんな人なの？」

レイチェルは、人が誰かを愛するようになると、ふだんの姿とまったく違ってしまふことに驚いた。ヘレーナはかなりきれいな人だ、とは思っていた。だが今この友だちの顔が何となく艶やかな表情に変わってしまうと、いつもは本当に飾り気のない顔つきだったのに、とあらためて気がつくのだった。

「おもしろい人よ。シオニズム<sup>(3)</sup>の運動をしていて……そのうちわかるわ」

ヘレーナは腕をレイチェルの腕に絡ませ、2人はふかふかした絨毯のような松の落ち葉の上を弾むような足どりで歩いて行った。レイチェルは立ち止まると首を後ろにそらし、木々の間から覗く青空を見上げ、両腕を伸ばして深く息を吸った。口には出さないが、17歳の少女の揺れ動く心は今にも破裂しそうだ。たいていは憂鬱で物思いに沈んでいるが、時おり自分の魂だと信じている内奥にある充実したものが生身の肉体から飛び出して、ジャルキの村はずれにある森の高い木の上に舞い上がって行くような経験をすることがある。

2人は森の小道から、チェンストホーバの町に通じる埃っぽい道路に出た。道路の先には、広大な田園風景が、50マイルほど北にあるその町に向かってずっと広がっている。チェンストホーバの小高い山の頂には、カトリックの教会が建っている。そして、その向こうがワルシャワだ。

午後の太陽は西に低く傾いていた。レイチェルは道路の向うに広がる景色に目をやった。農婦が1人で畑を耕している。新しく掘り起こされた豊かな褐色の土が、扇を逆さに開いたように外向きに広がり、畝が作られていく。太ったその農婦は、鍬を地面に投げ出しスカートを持ち上げて中腰でしゃがむと、滝のような汗がからだから流れ落ちた。やがてスカートを下ろすと、大地に身を屈めて再び畑を鋤きはじめる。それを見ていたレイチェルはため息をついた。あの農婦はこのままジャルキで暮し、結婚し、そのまま死んでいくのかという絶望的な思いと、こんな生活からきっと逃れるという確信、いまは何かの瀬戸際にあるのがわかるという思いとの間で心が揺れた。

「それじゃ、今晚行くわ」レイチェルはヘレーナに言った。

「遅れないでね。きっとよ」

ヘレーナは、ジャルキに着いて歯科を開業した直後から、土曜の夜にサロンを開いた。そこへ行くことはレイチェルにとっては一週間でいちばん楽しいひと時だった。しかし、そのことが家ではいつも論争の種だった。ヤコブがヘレーナのサロンに来ることになっていたその晩も、レイチェルの父はいつものように反対した。

「どうしてお前はいつもそこへ行かなくちゃあならんのかね？結婚したい男に会いに行くのならわかるが。ヘレーナはとんでもない考えをお前に植えつけるだけじゃないのか？」食堂のテーブルの上席に座っている父が、椅子から身を乗り出して言った。父はふさふさした顎ひげからパン屑を無意識に払い落とした。

「とんでもない考え？」レイチェルは言い返した。「みんなはアレクス・ハフティカの話を話

すのよ。パパだってアレクス・ハフティカのことは話すでしょ。それからシオニズムのことも、これもパパがよく話すことよ」

「親に向かって何を言うか！連中は昔からのしきたりを何ひとつ守らない。シャバットさえもだ。お前もそのうち奴らのようになってしまうぞ」父は手でテーブルをドシャンと叩いた。お茶のグラスが揺れた。

やはりパパは厳しい人だから、私が行くのを禁止することもできる。でもあえて逆らうこともないわ——そう考えてレイチェルは口調を変えた。

「パパ、ちょっと楽しむだけなのよ。友だちができるからソフィーも行かせるといいわ。歌ったりピアノを弾いたりする。みんな私の友だちで、それが私なりの楽しみ方なの。あっ、遅れるといけなから、もう行かなくては。パパの毛皮の帽子貸して——お願い、パパ」

「レイチェル、私のウールの帽子をかぶっていてもいいわ」妹のソフィーが助け舟を出した。

「いいえ、パパの大きい毛皮の帽子がいいのよ。私、好きだから」

「かぶって行け」結局いつものようにレイチェルには逆らえず、父は言った。とりなそうと身構えていた母はほっとして、夕食の後片付けをはじめた。

レイチェルは家から走り出て、3月も終わり頃の大気を胸いっぱい吸った。めったにない晴れ渡った夜空だ。暗くなるにつれて、夜空の星は数を増しはじめ、町をよぎってヘレーナの家へ急ぐ街路を月が明るく照らしている。店はすべて閉まり、果物や野菜を売る屋台もしっかりシャッターが下ろされている魚市場やコーシェル<sup>(4)</sup>を売る市場を通り過ぎた。本通りの端に来ると道は二股に分かれていて、レイチェルは左の道を選び、両側に小さな家が並んでいる舗装してない街路を進んだ。右へ行くと、父の皮革工場が建っている町の外れに行くのだ。4人の兄弟たちはみんな学校を終えるとそこで働いているが、毛皮の臭いがとてもひどいので、レイチェルはめったにその工場へ足を踏み入れることはなかった。どうやってみんなその悪臭に耐えているのかしら、と思う。もちろん悪臭は仕方のないことだ。父は息子たちみんなに働くことを要求しており、とくに長男には強く望んでいる。儲かる仕事で、そのお陰で家はジャルキで最も裕福な家庭になっていることは、レイチェルにもよくわかっていた。

レイチェルは心を少し弾ませてヘレーナの家に近い。静まりかえった夜気の中を、赤々と明かりの灯された家の中から、話声が高くなったり低くなったりして聞こえてくる。ドアをノックして到着を知らせると、玄関のホールに入って居間の外に置かれた麦わらのマットで靴の泥を拭き落とし。居間の小さな敷居を跨いで中に入ると、今まで見たことのない男の人が話している最中だった。

「諸君はまったく井の中の蛙だよ」男は一瞬レイチェルの方に目をやったが、話し続けた。「私も目覚めるまではそうだったが」

ヘレーナは部屋の一番奥にある寝椅子にもたれていたが、手を上げて言った。「止めて、ちょっと話すのを止めて。ヤコブ、こちらレイチェルよ。レイチェル、ここへ来て私の隣に座って」

レイチェルは部屋を横切り、ヘレーナの近くの大きなふかふかした丸椅子に腰を下ろした。部屋にはその他に4人の男女がいた。ドアの一番近くにある椅子にくつろいでいるのはピテックで、長い足を前方に投げ出し、首の後ろで腕を組んでいる。その隣は彼の新しいガールフレンドのマルタ。すばやい機知に富む女性で、いつもピテックが発する皮肉にうまく付き合う似合いの相手だ。ヘレーナに向かって座っているのはスタニスラフ。彼は経済学を専攻しているワルシャワの学生で、レイチェルよりいくつか年上だったが、少し人を見下すような態度があり、どちらかと言えば近寄りたくない。週末で家族に会いにジャルキに帰って来るのだ。もう1人はこの町の薬剤師モテック。ともに過ごしたワルシャワの学生時代にはじまって、長い間ヘレーナを愛しており、いつもよく気がついて、仲間のためにクッキーや小さなペーストリー<sup>(6)</sup>を焼いたり、後片付けを手伝ったりする。レイチェルにはいつも親切で、その時も話し続けようとするヤコブを遮って言った。

「レイチェル、よく来てくれたね。今週はヤコブがヘレーナのお客様だ。彼はみんなをパレスチナへ行かせようとしている。ヘレーナが説得されてしまわないか心配だよ」

モテックはできるだけ陽気に振る舞おうとしていたが、その声は悲しみの色を隠せなかった。レイチェルは、伏せたまぶたの下からヤコブを見詰めているヘレーナの姿をのぞき見た。何も言わないで帽子を脱ぐと、丸椅子の上にのせた足をスカートの中で丸めて、ヤコブの話がまた始まると静かに座っていた。

ヤコブは部屋の中を威勢よく歩き回った。ヘレーナよりも背が低い、レイチェルよりは高く逞しい体つきをしている。彼は顔をしかめて話し出した。

「ヨーロッパ中のユダヤ人がパレスチナに行って定住しようとしているんです。そうなれば今にパレスチナは凄惨な国になるよ。ところが諸君はただここに座って、おしゃべりしているだけだ！」

「ヤコブ」ヘレーナが言った。「私たちはユダヤ人であると同時にポーランド人でもあるのよ。パデレフスキ<sup>(6)</sup>のおかげで、政治は安定しているし、ピウスツキ首相は私たちの味方よ。今は独立国ポーランドだから、支持しなくてははいけないわ」

「うん、そうだよ」スタニスラフが黒い紙巻たばこを深ぶかと吸い込んだ。「ポーランドには魂がある。ピアニストが政府を率いている国なんて、他のどこにあるかね？」

「独立国ポーランドだと！」ピテックが苦々しげに言った。「われわれにとっては、さらなるボグロム<sup>(7)</sup>を意味するだけだ。大戦中われわれはポーランドのために戦ったというのに、今ではユダヤ人の商店はボイコットされ、年寄りたちの顎鬚は切られている」

「ここではボイコットなんてないよ」モテックが言った。「うちでは以前よりもポーランド人農家の客は増えている。毎週市の立つ日には、田舎から出てきた人たちが、チェンストホーバへ行くよりもうちの店で買い物をしてくれる！私のところは商売繁盛だよ」

「君たちみんなの近視眼的な見方にはうんざりだよ。目先のことしか見てないじゃないか。世間にはそれで長い先まで見ているつもりの人もいるだろうがね」ピテックは笑った。

「何という機知のある天才なの、ピテック！」マルタがからかう。「あなたはいつもぶつぶつ不

平を言うことしか知らないと思っていたわ」

「まあ、このようなおしゃべりこそが、まさに諸君がここではいかに無力であるかを示している、とおわかりでしょう」ヤコブは言った。「それは私がみなさんに話していることを際立たせているだけです——われわれは祖国を持たなくてはならない。いわゆるポーランド化——実際は同化なのですが——それは何の役にも立たない。なぜなら、たとえ諸君が同化を望んだとしても、彼らは同化させてはくれないだろうしね。それなのになぜ諸君はそんなに同化を望むのかね？」

「私はもうポーランド化していますよ」スタニスラフは少し訛りのある話し方でゆっくりしゃべった。レイチェルにはそれはわざとらしく聞こえた。「ワルシャワではまったく違っています。みんなポーランド語を話しています。私たちはポーランドの一部になっているのですから。でもそれは同化というものではありません。もちろん大学には根強い反ユダヤ主義が渦巻いています。解決策は政府の中に参加して、内部から変えるために働くことです」

「そうだ、それがハフティカの言っていることだ」思いがけなくピテックが同意した。「われわれは強力な政治運動を起こさなくてはならない」

「そんな考えはもう破産しているよ！」ヤコブはただけしく言った。

とにかく、議論の行き着くところはいつもアレクス・ハフティカだった。レイチェルはいささか退屈になってきた。ヤコブの強そうな腕、シャツの下で盛り上がっているその筋肉を見て、彼女はひとりで楽しんでいた。

「もうたくさんだ」ピテックは言った。「さあヘレーナ、きみの作ったおいしいケーキでもいただこう。かわいいレイチェルちゃんはこの話には興味ないよね。でも、関心は持つべきだ、レイチェル、関心はね」

レイチェルは何も意見は述べなかった。そこにいること、そのような重大な議論の真ただ中にいることだけで楽しかった。しかし、一方では親密に結びついている家族に囲まれて安全な生活にとっぷり浸りながら、芽生えはじめた青春の夢に満ちあふれているので、みんなが感じている恐怖や政治への情熱を本気で考えることはなかった。

みんながぞろぞろと食堂へ入って行くと、ヘレーナは毎週土曜日にピカピカに磨き上げている銀のサモワールからお茶を注いだ。みんなはパニラ・クーチェル、粉砂糖のかかった三日月形のペーストリー、それに砂糖漬け果物やプルーン入りのバターがたっぷり入ったふっくらした小さなケーキを食べた。そして村のうわさ話をしては笑い転げた。レイチェルがジャルキにいてよかったと思うのはこんな時だ。このサークルに入っていると何か大冒険が待ち受けているようで、それが大好きだった。将来どこで暮らすことになっても、ジャルキはいつもそこにあり、飛び出して行ってもいつでも戻って来ることができる本拠地なのだ。

「あら大変、もう 11 時だわ」ヘレーナが大声で言った。「ヤコブ、お願いだからレイチェルを家まで送って行ってくれない？」

パーティは終わったので、レイチェルがコートを着るのをヤコブが手伝い、2 人はひんやりとし

た星明かりの外へ出て行った。レイチェルは本通りへ出るまで泥んこ道に気をつけながら進んだ。ふらつかないようにヤコブが肘を持って支えた。強く握りしめてくれるのがレイチェルは好きだった。ヤコブはレイチェルが知っている村の男の子たちよりずっと大人びて見える。一人前の男だ。長い間2人とも何もしゃべらなかつた。レイチェルは何を言ってよいかわからなかつたし、ヤコブはひとりで思いに耽っているからだ。ついにヤコブが沈黙を破った。

「レイチェル、君は美しい娘だね。きみがその毛皮の帽子をかぶって、思いつめたような目で歩いていたから、ぼくはとりこになってしまった。どうして何も言わないの？」

「私はお話を聞くのが好きなの」レイチェルは答えた。「そうやって勉強するのが」この人は私に気があるそぶりをしているのかしら、それともばかにしているの？レイチェルは考えたが、どちらにしてもいい気持ちではなかつた。

「じゃ、ぼくはここに2週間いるから——君に教えることはいっぱいあるよ——パレスチナについてね。ヘレーナのところで会おう」

いつのまにか家に着いていた。ヤコブは「おやすみ」と言って帰って行った。

次の2週間、レイチェルはほとんど毎日、午後あるいは夕食後ヘレーナの診療所へ出かけて行った。ヤコブがいつもそこにいた。ある晩、レイチェルとヘレーナとヤコブが食堂のテーブルでお茶を飲みながらパレスチナの話をしていると、レイチェルの弟デビッドが飛び込んできた。家から走りどおして来たので息を切らしている。

「パパが、すぐ家に帰って来るように言ってるよ、今すぐだよ！」とイディッシュ語<sup>⑧</sup>で叫んだ。

「ポーランド語で話さない」いらだってレイチェルは言った。「お茶がすんだら帰るわ。あなたは先に帰っていて」デビッドがドアをピシャリと閉めて出て行くと、レイチェルはため息をついた。「じゃあ今夜は遅いから、また明日ね」

町の中を歩いて、ヤコブはレイチェルを送って行った。あたりは暗く、ところどころに点いている街灯と道沿いの家々から洩れてくる明かりをだけを頼りに、2人は歩いた。ポーランド人の家の前を通りかかると、ぐったりしたキリストの体を完全な姿で彫刻した十字架が入口のドアに寂しげに懸かっている。レイチェルは目をそらした。庭には白いガチョウの小さな群れが声もなく亡霊のように身を寄せ合っている。

「どうしてパレスチナのことをそんなによく知っているの？まだ行ったこともないし、そこにご家族がいらっしゃるわけでもないのでしょうか？」レイチェルは尋ねた。「そこで何をしますの？パレスチナは地球半分も離れているのよ！」

「自分の家庭を築くんだよ」ヤコブは言った。「国造りも手伝うんです。そこでの生活は実にきびしいが、頼もしい風景が広がっているんだ。今は不毛の土地だけど、私たちはそこを緑の土地に変えるよ。ポーランドにいると息がつまりそうだ——一方からは反ユダヤ主義、もう一方からは狭量で敬虔なユダヤ人に締め付けられてね——ぼくは息がしたいんだよ」

ヤコブが揺るがない信念を抱いていること、自分より偉大なものに、一つの理念や人生の目標にあんなに集中できることは、何とも羨ましい！私にははっきりした目標は何もなく、ただその時々で感情で生きているだけだわ。レイチェルは将来、もっと大きな世界に出ていくことを漠然と考えてはいたが、どこへ行くのか、何をするのか、だれと結婚するのかはわからなかった。ヤコブは自分の行く先を明確に知っており、それがヤコブに対する憧れをかきたてた。相手がこちらに心惹かれていることを知っていたので、レイチェルはそれとなく誘うような素振りを見せた。

「君もパレスチナへ行くといい」ヤコブは言った。「君のような丈夫で若い女の子は、畑で働き、太陽の下でオレンジを摘むんだ。肌は焼けて健康になり、大勢子どもが産めるよ」

「パパが何と言うか、想像がつくわ」レイチェルは笑った。歩きながらヤコブの腕をとり、からだを寄せ合った。ヤコブのからだは固く引き締まっていた。胸も、腕も、力強い足も。

「ヤコブ、私は農場で働きたくないの！しかも未開の国なんかで！でも、この小さな町からは出て行きたい。都会へ出て魅力的な友だちをつくったり、きれいなドレスを着たり、えらい人たちのパーティに出たりしたいのよ。ヘラ（ヘレーナ）のようなサロンもやってみたいけど、ジャルキじゃなくてね」

レイチェルは自分の言ったことがヤコブの気に障ったと思って、声の調子を落とすと少し遠慮がちに言った。「あなたは自分が素敵なことをしているんだとみんなに思わせるようにしなくてはね。パレスチナへ行ったら、手紙を書いてありのままの様子をぜひ知らせて」レイチェルはからだをヤコブの横にぴったりとくっつけた。

「レイチェル、君は何が重要かわかっていない。それはきれいなドレスやパーティじゃないんだ」ヤコブは足を止めてレイチェルの手首をつかんだ。レイチェルはヤコブの方に向き直って、相手の視線を受け止めた。キスしてくるものと思って息遣いが荒くなり、そのまま待った。だがヤコブはじっと顔を見つめているだけだった。レイチェルは突然、この人は自分という人間の核心を値踏みし、判定をくだそうとしていると感じた。私がただ軽薄な女の子なのか、それとも目的のためには辛い生活にも耐えられる女の子なのか？それともこの人が興味を持つほどの価値が私にはあるのか？判定ははたしてどうなのだろう？レイチェルは自信がなくなって、うつむいた。

夜の静けさの中でヤコブは小声で言った。「ぼくは来週発ちます。日曜日にね。でも君には手紙を書くよ。そしてかならずまた会う」

レイチェルはこのヤコブの約束に胸をときめかして、自分がヤコブに好かれていると思うとヘレーナに打ち明けた。

「わかっているわよ」ヘレーナは皮肉っぽく言った。「でも、あなたにとってヤコブは単なる遊びの相手なんでしょう」

「遊びなんかじゃないわ」レイチェルは反論した。「彼はとっても真剣よ。だから私が彼の気持ちや少し軽くしてあげるの」そう言ってから、彼女は黙り込んだ。去って行くヤコブに二度と会うつもりはなかったからだ。どうして私はわざと彼を騙すようなことをしているのかしら？開拓者になるなんて思い描いていたことじゃないし、ヤコブは私の夢の男性でもない。それなのにな

ぜ？ただ自分を見せびらかそうとしているだけ？それならもうやめよう、とレイチェルは誓った。次の日曜日ヤコブがパレスチナに出発するとき、レイチェルはヤコブのことは忘れようと心に決めた。

しかしヤコブから来た最初の手紙を見ると、レイチェルは興奮のあまり顔が赤くなった。それを自分の部屋でこっそり読んだ。ヤコブが去ってしまったいま、再び彼が魅力的に思えてきたのだ。手紙は定期的に来るようになり、アラブ人やイギリス人のこと、ヤコブが住んでいるキブツ<sup>(9)</sup>のことも詳しく述べられていた。

レイチェルは初めのうちヤコブの手紙をヘレーナに読んで聞かせていた。こんなことはよくないとぼんやり思いながらも、そうしないではいられなかった。ヤコブの手紙がレイチェルをどんなに生き生きさせるか、パレスチナでの生活がどんなに可能性に満ちているか、おそらくそれを理解できるのはヘレーナしかないと思ったからだ。しかし手紙に書かれているロマンチックな言葉は、最初は控えめだったが来るたびごとに強烈になり、ついにヘレーナの前では読みづらくなってしまった。

レイチェルは夜遅くなってみんなが寝静まってから返事を書いた。毎回の手紙に、自分で作った短い詩を入れた。ヤコブはレイチェルの無邪気さを嘲りもしなければ、自らの魂の憧れを表わそうと不器用に模索するその姿を笑いもしなかった。それに励まされて、レイチェルの詩はますますロマンチックになっていった。2人の手紙のやり取りがどこへ行き着くのか見当もつかなかったが、そんなことはどうでもよかった。心をわくわくさせるのは甘いロマンスという観念で、現実ではなかった。実際のヤコブはレイチェルの心からほとんど消え去っていた。手紙の中のヤコブだけが現実であった。

翌年レイチェルはチェンストホーバにあるギムナジウムを受けることになっていた。家族の男子はポーランド人学校への就学を免除されて、ユダヤ教の教育をうけるためにケイダー<sup>(10)</sup>へ行ったが、レイチェルとソフィーにはそうした宗教的な義務はなかった。シナゴークで礼拝を始められるミンヤン<sup>(11)</sup>に必要な十人のユダヤ人の中に入ることはできなかったし、シナゴークでトーラ<sup>(12)</sup>を朗読することもできなかった。タルムード<sup>(13)</sup>の学者になる望みもなかった。レイチェルはジャルキの村の学校を修了して、ヘレーナが貸してくれる本は何でも読んでいたが、さらにもっと多くのことを学びたいと思った。パパには勉強する意義なんてわかっていない。もう私の花婿探しなんかしているんだもの。もっと教育を受けたら、私は何をしようかしら？

それでも、レイチェルが猛烈な泣き聲で迫ったので、チェンストホーバで勉強することを頑固に拒んでいた父も、学位取得につながる学校の入学試験の準備をすることに同意した。レイチェルは毎朝まだ暗い5時に起きて、ソフィーと一緒に使っている寝室の机に向かった。そこでレイチェルは薄暗いランプの光で勉強したが、周囲がまだ静まりかえっている時にはヤコブに手紙を書くこともあった。もちろん主としてギムナジウムの受験勉強に打ち込んでいたが、夜明けの光がさすのを合図に、やがて家族の者が目を覚ました物音が聞こえはじめると、ブロンズの巻き毛

を枕いっぱいに拡げて眠っているソフィーを起こす時間になる。夜明け前のこの時間、レイチェルはいつもソフィーをいとおしむ気持ちでいっぱいになる。やがて離ればなれになるかもしれないことを、まだ何も知らない相手に、別れる前に感じる優しさだ。

たしかに、ことあるごとに父に抵抗し、小さな反逆もしてきたけれど、レイチェルには父が正しいことはわかっていた。ヘレーナのサロンに引かれて行ったのは、家族から離れていく長い旅路の逃れようのない始まりだったのだ。まだ出発する準備まではできていなかったけれど。それとも、もう旅を始めていたのかしら？レイチェルは気づいていなかったが、ギムナジウムの卒業証書が旅の査証になるはずだった。ああ、卒業証書がほしい！何よりもほしい！尊敬するあの友人たち、ヘレーナ、ピテック、スタニスラフ、いやモテックでもいいが、あの人たちのようになりたい。ソフィーのグループやケイダーへ行った弟たちから離れて、教育を受けたい！

ある日、いつもとは違った手紙がヤコブから来た。レイチェルは封を切らないでそれを自分の部屋へ持って行った。ソフィーが入って来ないようにドアに椅子をもたせかけて、開いた窓のそばに座って読んだ。

「愛するラヘーラ……」これを読んだレイチェルの胸にはヤコブに対する熱い思いが溢れてきた。この愛称はママとソフィーしか使わない。パパだってめったに言わないのだ。

ヤコブの手紙には、オレンジの収穫のこと、すべての物を共有している生活のこと——労働のすべてと楽しみのすべてが書いてあった。将来の生活設計のすべて、開拓地で進んでいる建築のすべてだ。現在4軒の新しい家と、食堂兼集会場となる本館の建物、それに子どもの家があるという。子どもの家は2、3年もしたらいっぱいになるだろう、とヤコブは思っていた。

「ぼくのところへ来てくれないか、ラヘーラ」手紙は続いた。「君の来るのを待ち焦がれている。来てくれたら、ぼくたちはこの星空の下で結婚しよう。開拓地を巡回しているラビがいて、ぼくたちを結婚させてくれるよ。反対する君の声が聞えてきそうだが、君の疑問はぼくがすべて解決してあげよう。君は『まだ若すぎる』と言うけれど、ここではみんな若い。若者の国なんだ。『家族から離れられない』と言ったって、若者はいずれ自分の巣から飛び立って行くのが自然の摂理だよ。それに君は言っていたじゃないか、『いつかはジャルキから出て行きたい』と。その時が来たのだ！」

「君は『ぼくを愛していない』と言うけれど——いや、いや——それだけはぼくにもどうにもならないなあ。しかし、たとえ君がそう言ったとしても、君の書いた手紙からはどうしてもそんなことは信じられない。どうか今すぐぼくと結婚すると手紙に書いてくれないか。そうすればその準備はすべてぼくが整えるから。君がこの手紙を受け取って、その返事が来るのはずっと先だということはわかっている。だから、その時まではこのことは考えないようにしよう。そうしないと、毎日の仕事が手につかないから。でも、それを心から取り去ることはできない。君の返事を待っています。愛をこめて、ヤコブ」

本当に私と結婚したいと思っているのだわ！レイチェルは驚いた。結婚。パパが結婚相手として考える近辺の町のユダヤ人青年ではなく、ちゃんとした男性が実際に自分に結婚を申し込むな

んで、想像もつかない。しかしどうしてこんなことになったのかしら？本当のところ私は見せかけの演技をしてきただけなのに。いまヤコブは私の生涯を変えてしまうような提案をしているのだ。

レイチェルは自分がパレスチナへは行かないとわかっていた。ヤコブはそのような生活が私のためになると想像できても、私のことを実際どれだけ知っているの？農場ではなく大都会を夢見ているとヤコブに話したことがあった。ああ、でも私は彼に憧れているのよ！子どもの家で子どもたちが眠っているあいだに、星明かりの夜に2人でダンスを踊ることを夢見ている。たぶん、そうよ。たぶん、どんなことだって起こりうるのだ！ジャルキから出て行きたいのなら、どうしてパレスチナへ行けないの？レイチェルはヘレーナの家へ走って行った。

「私と一緒に森へ来て。見せなきゃならないものがあるのよ」レイチェルはヘレーナを引っ張り出し、木陰の小道を歩いた。ヘレーナに手紙を渡したときでも、不安だった。2人はちょっと足を止めた。そよ風が起って木の梢が揺れ、頭上でかすかな音を立てた。8月も終わりで、もう秋が始まっている。でも、まだもう少し、私はぎりぎりまで未来の可能性をさぐってみるわ。レイチェルは心の中でそう呟いていた。しばらくしてヘレーナは手を脇に下ろした。その指には手紙を握りしめている。2人は再び歩き出した。

「またたく間に彼はあなたに恋してしまったのね！何とすばやいこと！あれはまだほんの春、春先の頃だったわね。あなたのことを知りもしなかったのに！どれくらい会っていたの、実際のところ？2週間でしょう。それから彼に手紙を書きだしたのね」ヘレーナは首を振り、目を伏せて言った。

「私はヤコブを何年も前から知っているわ。もし求められれば、明日にでもパレスチナへ行くわ」その声はほとんど聞き取れないくらいだった。意志が強くて、毅然として物事に動じないヘレーナの声とは思えなかった。

レイチェルは後悔の気持ちに苛まれていた。「ヘラ、ヘラ、ほんとうにごめんなさい、ひどくあなたを傷つけてしまって——こんな手紙を全部あなたに読み聞かせたりして。もっとよく考えるべきだったわ」ヘレーナはやさしく言った。「いいのよ、私もあなたに気づかせなかったのだし」

レイチェルは吐き気が込み上げてくるほど自分が嫌になった。ヘレーナとの友情をあんなに大切にしていたのに、私はなんという偽善者か、と思う。友情は相手の立場になること、相手の魂の中に入り込むこと、相手が犠牲をはらう気持ちをとともに感じることだわ。とにかく私はヤコブと一緒になることを望んでいないけれど、彼と縁を切れればヘレーナの気持ちをわかってあげることになるのかしら？

2人は黙りこくって町に戻りかけたが、レイチェルは過酷な苦痛を与えてしまったヘレーナと、愛してもいないヤコブとに対して深い後悔の念に駆られていた。つかの間ではあったがヤコブの胸の内を垣間見て、ヤコブが孤独で自分を必要としていることを知ってしまった。その心を自分

が満たしてあげられると信じこませたことに対して、あらためて自己嫌悪を感じた。しかしほとんど同時に、ヤコブは自ら選んだ人生を歩もうと固く決意しているのだから、パレスチナというその中心的な思想から見れば、自分など実際にはほんの瑣末な存在だと気づいていた。私が自分を別の世界に導いて行くためにはだれかが必要だったのとまったく同じように、おそらくヤコブも自らの夢を成就するために、情熱的だが未知の可能性を秘めた私のような人を身近に必要としたのだろう。ヤコブが私をジャルキでの生活から救い出してくれるとほんの束の間だが勝手に夢見たように、ヤコブも自分の夢に合わせて、自分勝手なレイチェル像を造りあげていたのだろうか？おそらくヤコブの熱烈な手紙も、私の手紙と同様に実際には現実離れした空々しいものだったのだろう。

ヘレーナとレイチェルは森のはずれに来ると固く抱き合って、別々の方角に歩き去った。それまで二人の間にあったささやかなバランスはもろくも崩れ去ってしまった——洋々たる可能性の縁に立つレイチェルと、失意のどん底にあるヘレーナとに。

家に走って帰るとレイチェルは長い手紙をヤコブに書いた。いろいろ理屈を並べ、言い訳いっぱいの手紙だった。

「ヘラはあなたを心から愛しています」とレイチェルは書いた。「彼女はいつまでもあなたのそばにいてくれるでしょう。ヘラは私の最愛の友です。友情は愛に勝ります」

1 かが過ぎて、レイチェルはヤコブから手紙を受け取った。手紙にはたった 1 行、次のように書いてあった。

「君はぼくを騙した」

#### 訳注

- (1) シャバット ユダヤ教の安息日。金曜日の日没から土曜日の日没まで
- (2) チェンストホーバ クラクフ北西約 100km の都市。ヤスナ・グラ僧院がある聖地
- (3) シオニズム ユダヤ人をパレスチナに復帰させようとするユダヤ民族の運動
- (4) コーシェル ユダヤ教で定める適正食品
- (5) ベーストリー バターを加えた煉り粉で作った焼き菓子
- (6) (ヤン・) バデレフスキ (1860～1941) ピアニスト・作曲家・政治家で、1919 年ロシアから独立したポーランドの初代首相
- (7) ボグロム ロシア語で暴行・略奪・殺人を伴う攻撃の意味であるが、とくに 1880 年代から第一次大戦後にロシアで起こったユダヤ人集団虐殺をさす
- (8) イディッシュ語 中高ドイツ語を土台にし、ヘブライ語をくわえた、ユダヤ人の用いる言語。14 世紀以来ベラルーシ、ポーランド地方を中心に口語として用いられた
- (9) キブツ イスラエルの農業共同体。労働シオニズムのイデオロギーに基づいて、パレスチナのユダヤ人入植、イスラエル建国運動の過程で生まれた。
- (10) ケイダー ユダヤ人の男子にヘブライ語を教えたり、宗教教育を行なう学校
- (11) ミンヤン 公式な礼拝が成立するために必要な定足数のことで、15 歳以上の男性が 10 名を越えなければならなかった
- (12) トーラ 旧約聖書の最初の部分で、5 つの書物（モーセ五書）を指す。シナゴークでは毎週の安息日にトーラをひも解き、朗読する。

- (13) タルムード ユダヤ教の口伝律法であるミシュナとその注解ゲラマからなるユダヤの法律と伝承を集成した本

### 第3章 家庭教師

レイチェルの生涯には、表面だけを見ていると取るに足りないささいなことが、後の彼女の人生観を大きく変えてしまう分岐点となるような出来事が、時として起こることがあった。気まぐれな愛の駆け引きに夢中になっていると、自分の良心が問われる深刻な結果に陥ってしまうことを今回の経験から彼女は身をもって学ぶことになった。しかし、一方では、ジャルキでの限られた経験とは違った生き方もあることを学んだ。パレスチナへは行かなかったが、彼女はヤコブとは違った生き方を何とか見つけ出さなくてはならなかった。

レイチェルの生活は楽しく、何ごともなく過ぎていったが、ヤコブが去ってからはじっと我慢して次の機会を待つことになった。ジャルキではその年も草木が萌え出る春を迎えていた。昼間は概して暖かいが夜になると冷え込んだ。レイチェルの家から通りを横切ったところにある広場には若者たちが日暮れとともに集まって来る。広場の片隅にある噴水には、町外れの農家の女たちがバケツで水汲みにやって来て、小声でポーランド民謡を口ずさんでいた。広場の向こう側ではユダヤ人の若い男女がふざけあっている。レイチェルは居間の窓からそれを見ているだけであったが、ソフィーはほとんど毎晩そこへ出て行き、仲間に加わっていた。

父の毛皮工場の仕事は繁盛していて、チェンストホーバの町に直売店を開いているが、将来はワルシャワにも販路を拡大する予定であった。一方、レイチェルの所にはギムナジウムの試験勉強のために新しい家庭教師が来ていた。準備ができればチェンストホーバで受験することになるのだが、父は本心では今でもそんなことは女にとっては時間の無駄だと思っている。

「レイチェル、おまえもそろそろ結婚しなくてはね」と母は彼女に言った。「ギムナジウムに進んでも、それからどうなるの？おまえも18だし、先の見通しもないのよ」

土曜日の午後、母を手伝ってベッドの整頓をしていたレイチェルは手にしていた枕をぎゅっと抱きしめて、窓の外の広場に目をやった。もう落ち葉が舞い始めている。まあ、先の見通しもないなんて、何てひどいことを！そんなこと本当なの？私に残されている道は弟のように誰かと結婚することしかないの？ポーランド語もまともに話せないのに？ああ、いやだ、いやだ！彼女は黙り込んでしまった。

階下から歌声が聞こえてきた。父がシナゴークへ行っている土曜日の午後、ソフィーの友だち6、7人が階下の部屋に集まって歌をうたっていた。ソフィーの澄んだソプラノが他の声を圧倒して聞こえてくる。誰かがピアノを弾いていた。音符を間違えて、ちょっとの間がやがや騒いでいたかと思うと、急にはじけるような笑い声が起こる。それはまるでクリスタルガラスの水差しが割れて床の上に破片が飛び散っていくようだった。

ソフィーは、ブロンドの髪を持ったふっくらとした可愛らしい女の子で、いつも若い男の子

たちに囲まれていて、前途は洋々としているように思われた。レイチェルは羨ましい気もしたが、自分の方がソフィーより優れていると思っている。彼女は階段の上立っているだけで、彼らの集まりに加わることはできないでいたが、その部屋へ降りて行きたいという気持ちはあった。

すでに夕暮れ近くになっていた。ソフィーはハッとして出し抜けに言った、「大変、パパがもうすぐ帰ってくるわ！」

1人の男の子がカーテンを引いて窓の外を見て言った、「お父さんが今角を曲がったぞ、急げ！」ピアノを弾いていた子は、慌ててピアノの蓋をした。タリス<sup>(1)</sup>を身につけて、笑いかみ殺しながら晩のミンハー<sup>(2)</sup>のお祈りをしている振りをする。「いいか、お前たち、シャバットの日はお行儀よくするんだぞ！」1人が父の口真似をして厳かに言った。父が家の中へ入って来た。若者たちをじろっと見回してから、レイチェルの傍を通り、2階へ上がって行くのを彼女は黙って見ている。

レイチェルは、ソフィーの仲間たちの近くへ行くことはあったが、彼らとは別の生き方をするのが自分の宿命のように考えていたので、一緒になって気軽に冗談を言い合うこともできず、その一員にはなれないことは自分でもわかっていた。彼らの中にも、レイチェル自身まったく気が休まることはなかった。彼らもヘレーナのように彼女を理解してくれることはなかった。それでも、彼らが居間で歌ったり笑ったりしていると、彼女はときどき立ち寄ることもあった。そんな時には、まだ心から消え去っていないものへのノスタルジアを感じるのであった。ソフィーのソプラノの歌声が、他の者たちの歌声と混ざり合って、時間と追憶を越えたように流れてくると、レイチェルはその光景と歌声が永遠に消えないように心に刻みつけた。彼女は家族の真ただ中にながら、彼らとの別れを思うと寂しくてならなかった。

新しく来た家庭教師の名前はパベルと言い、当然のことながらレイチェルはすぐに彼を好きになった。しかし彼はいわゆるゴイ<sup>(3)</sup>と呼ばれる人なので、彼女の夢は胸の内にとどまっておくしかなかった。レイチェルが彼に興味を持っていることをもし父が知ったら、彼はすぐにお払い箱になってしまうだろう。パベルは若くて、ハンサムで、背が高くすらっとしていたので、彼の方がレイチェルを意識しなかったら、むしろその方が不思議に思われた。彼のまっすぐなブロンドの髪の毛が目にかかると、髪を掻き揚げる彼のしぐさが、レイチェルにはたまらなくかわいらしく思われるのだ。しかしジャルキに住むユダヤ人モルデファイ・ポル・ヨニッシュの娘が、カトリックのポーランド人の男と関係を持つというようなことは想像に絶することであり、そんなことは父の頭の片隅にも浮かばないことだった。しかしながら、母はそれも有り得ることだと思っていたので、レイチェルからは監視の目を離さなかった。

パベルは近くにあるラドムの町の出身だった。「それで」と、父は彼に面接したとき言った。「君はコシュチック神父の所にいるのだね。そこはポーランド人学校のすぐ裏側になるから、その学校で教えた後レイチェルの勉強をみてもらう時間は十分あるだろう。わしは金というものは有効に使わなくてはならんと思っているから、他の先生だって雇うことはできるんだ。だからよく考えて本当のことを言ってくれたまえ。聞くところによると君は来年からワルシャワのギムナジ

ウムの教師になるそうじゃないか—— おそらく大学でも教えられると思うがね。それは本当か  
ね？」訛りはきつかったが父はポーランド語も話すことができた。

「はい、そうです」パベルの声は柔らかであったが、しっかりしていて丁寧であった。「9月か  
らはワルシャワで教えることになると思いますが、それはギムナジウムです。私は大学で教える  
にはまだ勉強不足です。博士号をとらなくてはなりません」彼は優しい微笑を浮かべてレイチェ  
ルを見た。彼女の心の中で何かがとろけるような感じがした。「私は午前中だけ学校に勤務して  
います。午後は毎日正午から5時までお嬢様の勉強を見させていただきます」

最初の2、3週間に、レイチェルとパベルとの間で交わされた会話は、数学・歴史・文学に関  
することだけだった。パベルは1時間の休憩の間は自分の住んでいる教区教会の家に戻っていた  
が、ついに10月のあるすばらしく天気の良い日にレイチェルは彼を森の散歩に誘った。パベル  
は簡単にそれに応じた。彼女の好きな科目は詩だったので、歩きながらミツキエビッチ<sup>(4)</sup>とシェ  
クスピアの詩を大声で朗唱した。それは彼から暗誦するように言われていたものだった。

数週間が過ぎると、ソフィーはレイチェルと一緒に外出してくれなくなったと不平をもちよ  
うになった。ヘレーナも、「近頃あなたは土曜日のサロンにあまり来てくれないわね」とレイチェ  
ルに言った。

「勉強してるのよ」と言い訳して、「私はずっと勉強よ。ギムナジウムの卒業証書を取らなくて  
はならないからね。来年はチェンストホーバに住みたいの。私ももう19になるから、パパも反  
対できないはずよ」と打ち明けた。

実際のところ、レイチェルはソフィーのパーティにも、ヘレーナの夜会にも飽きあきしていた。  
ユダヤ人とポーランド人に関するアレクス・ハフティカの見解について議論し、シオニズムにつ  
いて果てしもないおしゃべりを続けることにはもう関心がなくなっている。そして、もしこんな  
ことをパベルに話したら、あまりにも私の心が狭くて、あまりにもユダヤ人的だと思われるま  
うわ、と彼女は考えた。

やがてレイチェル毎日パベルと森を散歩するようになった。1時間の休憩が時には午後遅くま  
で延びることもある。2人が静かな森の中を歩くと、木々の間から漏れる午後の日光が地面にま  
だら模様の影を描いていた。レイチェルの澄みわたる声が熱を帯びて、松や野の花々の香りの中  
を響き渡るのだった。

「甘き愛の苦しみよ、汝は枷となり我を縛れり  
露のごときはかなき望みもて焦がれし心を」

2人は歩みを止めた。パベルは彼女の前に立ち止まり、松の大木の幹にもたれている彼女に、  
頭を下げてキスをした。しばらくお互いの体を寄せ合っていたが、それ以上のことはなく2人は  
黙って帰途に着いた。レイチェルの胸は激しく波打ち、「彼は異教徒よ、彼は異教徒よ！」と心  
の中で繰り返した。

翌日パベルが勉強を教えに来たとき、彼は何も言わなかったが、レイチェルの心にはあの森の  
中でのキスの場面がまざまざと蘇ってきた。ああ、彼に私の体に触ってもらいたい。でもどうし

てよいか私にはわからないわ。こんなことはソフィーにも話せないし。下半身はどんな男にも触れさせたことはないけれど、パベルには触れてもらいたい。今までそんな途方もないことを、冗談めかしてそれとなく言うことなど思ってもみなかったのに、今ではその考えがレイチェルの頭から離れなくなっていた。今までは自分が何を望んでいるのかよくわからなかったけれど、私の体が求めているのはパベルの手が私の肌に触れること、私の乳房をやさしく愛撫してくれることだけよ！

まるまる 1 週間、レイチェルはそのことばかり考えていた。日曜日には外出したパヴェルを一目でも見ようとして、町のはずれにある教会のそばを通ってみた。節くれたった手の男たち、しわ深い顔をした老人たち、花模様のスカートをはいた女たちが、牧師のそばを通ってぞろぞろと通りに出て行ったが、その中に彼の姿はなかった。彼は早朝のミサに行ったにちがいないと結論づけてがっかりすると同時に、彼に会わなくてほっとする気持ちもあった。彼に会ったらどう言おうかしら、なぜ私がここに来ているのかをどう説明したらいいのか、考え続けていたからだ。

レイチェルは相変わらずヘレーナのサロンへ行っていたが、そこへ来る常連たちには幾分隔たりを感じていた。ピテックはそれに気づいていた。

「レイチェル、可愛い子ちゃんも大人になってきたね。そろそろ君も私たちのもとを去って行くのかね？」

「とんでもないわ。私がどこへ行くというの？」

「気持ちの上での話だよ」とピテックは言ったが、レイチェルは答えなかった。話題は例によってアレクス・ハフティカに移っていった。

「少数民族条約は良いものだ」とハフティカは思っているわ」ヘレーナが言った。「ユダヤ人の法的地位を保証しているし、ユダヤ人の主体性、ユダヤ人学校や施設を認めているのよ」

「そんなことはウクライナ人でも認められているよ」と、ピテックは彼女に言った。「彼らだって少数民族なんだ。それにウクライナ人はわれわれユダヤ人に好意的とは言えないしね。他にベラルーシ人、リトアニア人もいる。ベルサイユ条約は独立国ポーランドを認めるように主張しているが、そうなればわれわれにとっては好都合だ。戦争のもたらした良い結果の一つと言えるかもしれない。しかし条約の少数民族条項——これはごまかしだ。反ユダヤ主義につながる恐れがある。どの民族がその権利を手にするか、その内わかるだろうがね」

「あなたは難しく考えすぎじゃないの」ヘレーナが反論した。「法律が変わるとみんなが利益にあずかるのよ、特にユダヤ人はね。今ではすべての少数民族は自分たちの学校、自分たちの言語、そのための公的資金さえ持てるようになったわ。どうしてそんなに皮肉ばかりを言うの、ピテック。これからは良くなっていくって信じなさいよ。この条約はユダヤ人にシャバットの習慣まで認めているわ。土曜日は公式行事もないし、市民としての義務も免除されるのよ！ ついにこんな法律ができたっていうことは実際驚くべきことよ」

「ハフティカはポーランド化に賛成しているのに、どうして少数民族条約がそんなに重要だと考えているのかね？」とモシュチツキが言った。

「でも彼はポーランドへの同化主義者じゃないわ。同化主義者というのは条約を支持していない人たちのことよ。あの人たちはユダヤ人がポーランド人と区別されなくなることを望んでいるの。ハフティカは文化的にはポーランド社会に適応している人だけど、ユダヤの文化的遺産を否定してしまうような同化政策には強く反対しているわ。その違いがわからないの？彼の書いた論説を読みなさいよ。ポーランドの文化は受け入れているけれど、彼は自分をユダヤ人だと明言しているわ。そしてユダヤの大義を推進している第一人者ですよ。少数民族条約はまさしく彼の考えにぴったりですよ」

「そんなものは事実上の国家主義だよ。いずれ国内の少数民族はばらばらになるだろうがね」とスタニスラフが少し投げやりな調子で言った。「各民族の少数グループが他のグループを押しつけて、少しでも多くの権利を勝ち取ろうと競争するようになるよ」

「それが本当の多元主義だわ」ヘレーナが言った。「私たちが共存していくにはそれしか希望がないのよ」

「ポーランド化するっていい考えね」レイチェルが熱意をこめて言った。「結局、私たちはポーランド人とそんなに違わないのよ。私たちがユダヤ教徒でなくなると言うつもりはないけれどね。ポーランド人はあくまでもカトリック教徒であるのと同じでね」レイチェルは声に力が入りすぎて急に顔を赤らめた。

「レイチェル」ピテックが興味深げに彼女の顔を見た。「君がこんな強い主張を持っているとは思ってもいなかったよ。何を勉強していたの？」

「私も本を読むのよ。そして自分なりの意見は持っているわ。たまたまポーランド人の知り合いもいてね。みんな私たちと同じよ」

「まったく同じっていうわけじゃないよ」ピテックが言った。

レイチェルは黙っていた。

レイチェルとパベルは毎日午後森を歩いたが、その時間はだんだん長くなっていった。2人の手がふと触れ合うといつもお互いに手をすぐ引っ込めた。彼女がこっそりパベルに触れようとしても、居間の大きな椅子に腰掛けている父にすぐ引っ張られて、決して開放されることのない引き具が付けられているような気がしていた。ところがついに、急に吹いてきた風に黄色の落ち葉が舞い、松ぼっくりがあたりにぼとぼと落ちる、曇ったうすら寒い日に、偶然2人の体が触れ合った。空想の世界でロープを引っ張っていた力が、父の手から急に抜けて、レイチェルは自分の体が前に突き進んだように感じた。

彼女はパベルに顔を向け、意を決して彼を抱きしめた。彼は驚いて彼女の唇から、髪の毛、さらに首筋にいたるあらゆるところにキスをした。彼の手はレイチェルの体を撫で回し、長い指はやさしく彼女の胸をさすった。興奮のあまり、固く抑制していた心が崩れそうになった。節度なく自制心を失えば、歯止めはなくなってしまう。彼は、彼女の体に覆いかぶさり、首、耳、唇にキスをしながら、襷の入り組んだスカートの中に手を入れ、彼女の太ももを、はじめは外側からやがて内股の方へと、ゆっくりやさしく愛撫していく。彼のブロンドの髪がレイチェルの頬に垂

れかかり、やさしくそっとくすぐる。レイチェルは彼の手を自分の足から取り上げ、腰の上に置いて身を引き離れた。

「やめて、だめよ」彼女は小声で言った。

なぜ、だめと言ったのかしら？レイチェルはその言葉を口にした瞬間思った。なぜ言ったの？村では禁じられていることだが、私は時代遅れの慣習に囚われない現代人であるはずだったんじゃないの？——はっきり言って、きっとピテックとマルタもそんなことはやっている——ヘレーナとモシュチツキだってきっとそうしてるのよ——でも、あの人たちは私に比べれば大人だわ——ひょっとしたらソフィーだって、あの友だちと行く森のピクニックで。そんなこと何も悪いことじゃないわね——パベルが私を愛することって——彼は今まさに私の耳元でそうささやいているわ。心の中で行きつ戻りつしているうちに、彼女の興奮は次第に冷めてきた。もちろん彼女は自分がそんなことをするつもりはないことはわかっていた——私はヘレーナやマルタとは違うわ——たとえソフィーが本当にそんなことしているとしても。彼女はパベルの手を押しつけて彼にキスした。彼の気持ちを傷つけたり、彼に気まずい思いをさせたくなかったからだ。

「私そんなことできないわ、パベル、だめよ」彼女はささやいて、ドレスの乱れを直した。彼は少し後ずさりしたが、顔は紅潮していた。

「ごめんね」と彼は言った。2人は離れたくなかったので、さらに森の奥へと入って行った。

「今度の日曜日にぼくと一緒に教会に行かないか？」しばらくして、パベルが言った。

「冗談でしょう！」レイチェルはうろたえて言った。

「本気だよ、冗談なんか言うものか？」

レイチェルはふいに襲った不安な気持ちを笑いに紛らせた。「私をじろじろ見ている人たちの顔があたりと浮かんでくるわ。私は正真正銘のブロンドでもないし、目も青くない。それに、ジャルキでは私を知らない人なんて1人もいないのよ。そんなことしたらパパは発作を起こしてしまうわ！」

「それなら、ラドムの教会へ行こうよ。誰も君を知らないから」

「でもなぜ？パベル、何のために行くの？」

「君にぼくのことを知って欲しいんだ。もちろん教会のこともね。それも君の教育なんだ」

「それじゃあ、あなたもシナゴークへ来てくれるの？」と、レイチェルは言い返した。でも、と彼女は考えた。彼にはシナゴークへ来てもらいたくないわ。大きなお祈りの肩掛けで覆った弟たちの頭からひとつだけ突き出た、背の高いパベルのブロンドの頭が前後に揺れて、わけのわからないヘブライ語で、声を合わせるどころか、ちぐはぐに聖歌を唱和している光景は思っただけで身震いするわ。それよりも、シナゴークは彼を入れてくれるかしら、ゴイを？たとえ入れたとしても、みんなきまり悪そうに彼をじろっと見てお祈りを続けるに決まっているわ。いやだ、絶対彼には来てもらいたくない！

「じゃ、私があなたと一緒に行くわ。パパにはピクニックに行くと言っておくから」

ある日曜日の早朝、2人はラドムに向かう馬車に乗った。レイチェルは、ほとんどくるぶしまで届きそうな、黒の手織りのスカートを履き、喉もとにレースのついた白のハイネックのブラウスを着ていた。馬がスピードを上げて風が吹き込んで来ると、風に煽られた彼女の黒髪は輝きを増し、小さな毛束が顔の周りにまとわりついた。彼女はとても楽しく大胆な気分になったが、教会に入ると、おどおどしてパベルの腕にしがみついた。

内部は暗かったので、明るい日差しの外から入って来た彼女は、しばらく目を慣れさせなくてはならなかった。香の匂いが空中に漂っていた。壁や柱の石がひんやりしていたので、彼女は歩きながらジャケットのボタンを掛けた。座席に沿って歩いて行くと人々は彼女を見つめていたが、すぐに無視するふりをした。何をするのか、いつ跪くのか、いつ讃美歌を唄うのか、次に何が行われるのか、周りの人はみんなよく知っていたが、彼女にはまったくわからなかった。跪きたくなかったが、それは許されないことだった。私は正しく十字を切ることも知らないし、そのやり方を覚えようとも思わないわ。とても気詰まりで、罰当たりな感じがするわ。こんなところへ来るなんて、私も馬鹿げたことを考えたものね。シナゴークとはぜんぜん違うわ。男の人たちの群れは女の人たちから離れ、お互いが息をひそめ、めいめいが自分の流儀で祈り、神様に一人ひとりが話しているのね。パベルが跪くと、レイチェルは自分だけ立っていると目立ちすぎると思って、慌てて跪いたが、十字は切らなかった。周囲のみんなが祈りを捧げている間、彼女は一点を見つめていた。高みにあるステンドグラスから差し込んで来る光の矢が、祭壇の後ろに高く掲げられたキリスト受難の像に降り注いでいる。

聖歌隊が、耐え難い苦しみをこめて「神の子羊」を歌った。そして、次には希望と復活の盛り上がる喜びを歌う清らかな歌声が、光に向かって立ち昇って行った。レイチェルはとつぜん心に突き刺さるような神の啓示を感じた。それは、地上のあらゆる生命が有限であることに対する悲しみと救いを、この人たちも同じように願っているのだという思いがけない発見であった。しかしそのとき彼女が身の周りに見たのは、しわの寄った男たちの顔であり、無表情な女たちの顔つきであり、自分と同じような晴れ着で装った若い女性たちであった。みんなレイチェルとは関係のない異教徒であり、彼女の生活には入ってこない人が、おそらくは彼女を憎んでさえいる人たちだった。ここは私の世界ではないわ。私が住むところでもないし、住みたくもないわ。私は今自分の家族を裏切っているのよ。ここから逃げ出したい。外の太陽の光の中を、ジャルキへ走って帰りたい！しかし彼女は手を膝の上で組んだままじっと座っていた。これは私にとっては教育なんだと思い直して、気高く荘厳な讃美歌とその美しいメロディーを楽しもうと努力した。

帰り道で、長く沈黙していたパベルが口を開いた。「礼拝は気に入ったかい？」

「ええ、素晴らしかったわ」レイチェルは用心深く付け加えた。「シナゴークとはぜんぜん違うけど」

「君が試験を受けにチェンストホーバへ行ったら、ヤスナ・グーラへ君を連れて行くよ。チェンストホーバのその教会はポーランドで一番美しいよ」

「パベル、私を連れて行くって何のためなの？」彼女は叫んだ。「私はユダヤ人なのよ。行って

もどうにもならないわ！」

「でも、改宗できるよ」

「私はぜったい改宗なんてしないわ！あなただってよ！」

「レイチェル、君は自分が言っていることがわかってないよ。ぼくはいずれ大学で教えることになるよ。大学で職を得ることは大変なことなんだ」彼の眉間に、2、3本の縦しわが走った。

「そのうえユダヤ人の妻をもつことなんてとても無理な話よ！」レイチェルは語気を強めた。「でも心配しなくてもいいわ。いずれにしても、私にはそんなつもりはないから」

「ラヘーラ、気をつけてね」ある日の午後、居間の窓近くに置かれた小さな丸テーブルに2人だけにいるとき、母がやさしく言った。手で編んだレースのテーブルクロスが床まで垂れ下がっている。銀のホルダーに入れたコップから午後のお茶を飲んでしたが、母はテーブル越しに手を伸ばしてレイチェルの髪を撫でた。

「パベルはおまえの結婚相手にはならないわ。でもそんなこと、あなたは知っているわね。彼はすぐにおまえから離れて行くわ」

レイチェルは驚いては母を見たが、ほっと息を抜いて肩を落とし、ようやく言葉を口に出すことができた。

「でも、彼は私を愛してるわ、ママ」

「あの人はゴイよ。おまえはユダヤの女で、彼にとっては、異国人で、違った人間なの。愛することとは別の問題よ。おまえにとっても、彼は違った人間よ。彼の住んでいる世界について何を知ってると言うの？そんなところへ行ったら、気の休まることはないわ。それに決しておまえを受け入れてくれることはないよ。結局どうにもならないわ。もう放っておきなさい、ラヘーラ」

「でも、ママ、どうして彼とワルシャワへ行ってはいけないの？ポーランド人とユダヤ人が結婚した例だってあるわ。もし彼がユダヤ人だったら、ママは喜ぶわ。私のためにあなたが願っているすべての条件を彼は備えているのよ——知性があり、態度は紳士的で、それに将来性があるわ。ただユダヤ人でないというだけで、なぜだめなの？」

「プー、プー、プー」母は悪魔を追い払おうとして、つばを吐きつける音を立てた。「おまえはユダヤ人の男子と結婚しなくてはなりません。わかっているはずよ。そんなことしたら、パパは永久におまえを追い出してしまって、シバの喪<sup>(5)</sup>に服すことになるわ」

「シバ！まるで私が死ぬみたい。なんて古くさいことを！」

「私も今のおまえと同じ歳だったとき、ゴイが好きになってね。私はきれいだったから、彼が私に求婚したのよ。彼は真剣だったけれど、何にもなくて終わったわ。おまえの場合もそうなるよ」

「パベルは真剣よ」とレイチェルは言ったが、その口ぶりは少し自信なさそうだった。

「まあ、ラヘーラ、ラヘーラったら、彼がおまえを弄んでいるのがわからないの？おまえがヤコブを弄んだように」レイチェルは顔を赤らめた。どうして母は何でも知ってるの？

「パベルにはおまえが考えているよりもっと大事なことがあるのだよ。彼には何しろ学歴があるのよ。おまえには苦しい思いをさせたくないからね。だから目を大きく開けてはっきり見るのよ。そうすれば少しは気持ちになるよ」

6月の中頃、レイチェルはギムナジウムの試験を受けるためにパベルと、お目付け役の母に付き添われてチェンストホーバへ行った。試験が終わってから午後遅く、レイチェルはカフェ・ブリストルで2人と落ち合ったが、とても嬉しそうだ。試験はうまくいったと思っていたし、ジャルキよりもずっと大きく、はるかに活気のあるチェンストホーバにいることが大変気に入っていたからだ。街には人が溢れていた——ユダヤ人も非ユダヤ人もいるわ。こういうところにいるんなことが起こるのね。お茶とペイストリーを済ませてから、駅に戻る途中、写真館の前を通りかかった。

「写真撮りましょうよ」と言ってレイチェルはまっすぐ店の中へ入って行った。母とパベルが彼女の後に続いた。写真屋は黒いピロードの暗幕を背景にしてレイチェルとパベルにポーズをとらせたが、母が二人の間に割り込んだ。

「ああ、そうですね。ママはぼくたちのお目付け役だった」とパベルが言うと、まるで試験を受けに来たことなど忘れてしまったように、みんなが上機嫌で大笑いした。それから写真屋はレイチェル1人だけのポートレートを撮った。

「これはめったにない素敵写真になりますよ。2週間以内にお送りします」と、彼は言った。

「送ってきたらあなたに差し上げるわ、パベル。私のことを決して忘れないでね」と、レイチェルは母が聞いていないところで言った。

夏が終わるまでに、もうパベルはいなくなった。ロマンチックな思いに気を惹かれることもなく、レイチェルは落ち着かない日々を送っていた。受験勉強が終わってしまうと、彼女にはこれといった目標もなかった。父の帳簿の手伝いをしたりして仕事を覚えながら、チェンストホーバに住むことを父に認めさせようと何度も頼み込んだ。ついに父は友人であるラビの家で家具付の部屋を借りるように頼んでくれたので、秋の初めに出発した。しかし毎週金曜日には汽車に2時間乗り、さらに馬車に乗ってジャルキに帰って来た。

ギムナジウムの試験に合格していたので、チェンストホーバに落ち着くと彼女は商業学校への入校手続きをとった。クラクフから来ているワンダという学生と友だちになり、彼女とはよく食事に出かけたり、宿題を一緒にしたりしていた。午後は父の経営する直売店で帳簿の仕事を手伝った。

#### 訳注

- (1) タリス ユダヤ人の男性が礼拝の時身につける縁に房のついた肩掛け
- (2) ミンハー 午後の祈り。日没のおよそ2時間前に行なわれ、シュモネー・エレスの祈りなどを唱える。
- (3) ゴイ ユダヤ人から見て、非ユダヤ人の男性をさす語。
- (4) (アダム・) ミツキエビッチ (1798～1855) ポーランドの詩人。ポーランド・ロマン派を代表する国民的な文人。代表作は叙事詩『パン・タデウシュ』

(5) シバの喪 ユダヤ教では肉親や配偶者が死去すると埋葬に続く七日間の服喪期間がある。

#### 第 4 章 チェンストホーバ —— 1920 年

底冷えのする冬の日曜日、日が暮れてからレイチェルはチェンストホーバの街を歩いて、アレクス・ハフティカの講演を聴くために社交クラブへ向かっていた。ランプの街灯はかなり長い間隔で立っているのだから、歩いていく道は明るくなったり、暗くなったりする。小声で歌を口ずさむと、息が白くなって顔の前に広がる。ハイブーツの上部は、長くて体にぴったり合ったコートの裾に隠れ、頭には父から借りてきた帽子が載っていた。寄宿舎のある通りはでこぼこの道で、角を曲がって平らな本通りに入るまでは、体のバランスをとるように気をつけなくてはならない。本通りまで来ると、街灯も人通りも多くなり、店のウインドには明々と灯りがともっている。立ち止まって見ると、ワルシャワの最新のドレスを着たマネキンが、真新しい帽子を被り、ピカピカの靴を履いている。レイチェルは服が好きだ。シルクのスリッパが買いたくて、食べるのを我慢して少しばかりのお金をためているくらいだ。彼女の夢は毛皮とレースの服を買うことだ。でも今は、来週の初めまで食いつなぐのにやっとのお金しかない。次の金が入るまでは何も買えない。しかし、不満はなかった——買い物プランを綿密に立て、持っているお金の範囲でいつも暮らすようにしていたからだ。それを思うとレイチェルはひとり微笑み、身に着けている毛皮のマフ<sup>(1)</sup>の中に深くと両手を突っ込んで歩き続けた。

社交クラブには少し遅れて着いた。講演はすでに始まっていて、部屋は人でいっぱいだった。後ろにも横にも人が立っていたが、4列目の真ん中に1つだけ席があいているのを見つけると、レイチェルは人々をかき分けて進んで行った。人のざわめきが起こったので、アレクスは話を止めてレイチェルが席に着くのを待った。レイチェルは壇上のアレクスを見た。よく引き締まった体格で、態度は堂々としている。講演が終ってお茶とケーキが出された時、彼と言葉を交わしたレイチェルは、彼が自分より少し背が高いただけだと、はじめて気がついた。

アレクスの話は、ギリシャ文化とユダヤ文化の違いに関するものであった。ギリシャ人は視覚的なものにこだわり、ユダヤ人は聴覚的なものに優れているから、ギリシャ建築のような独特なものが生まれ、ユダヤ教ではトーラが作られたのだと主張した。討論の時間はかなり対立した意見が出された。声高に話す1人の青年は、教会音楽やヘンデルのメサイア、ベルディのレクイエム、多くのバッハの音楽を引き合いに出して、ユダヤ人ばかりでなくて、聴覚的に優れている民族が他にもいると、アレクスの説に反論した。

「私はそれよりずっと昔のことを話しているのです」と、アレクスは言った。「広い意味では、その違いは今でも残っていますよ。カトリック教会は壮麗な大聖堂を建て、優れた宗教画を生み出しました。ユダヤ人は聖書を崇め、人と人との間の行いを律するためにタルムードという律法を作り出しました。そして、文学や哲学も作ったのです」

レイチェルはそこで交わされる言葉に耳を傾けていたが、その内容は難しく理解できなかつ

た。とにかく、どうしても私は個人的にアレクスに会いに行くわ。ヘラのサロンで、みんなで熱心に議論していたあのコラムの筆者がここにいるのよ。どうやって彼に近づこうか、そして何を話そうかと、講演の間中考え続けていた。そうだ、直接行って話せばいいわ、と彼女は心に決めた。

アレクスは、ほとんど若い女性ばかりの群れに囲まれて、聴衆の席から発言した青年と話をしていた。ジャルキでは、ヘレーナのサロンへ行ってもいつも引っ込み思案であったレイチェルであったが、チェンストホーバで一人暮らしをするようになってからは、新たな自信を持つようになった。自分の肉体的な魅力を意識するようになって、彼女の生来の内気な性格が、知らないうちに進化していたのだった。もし成功の可能性がないものと初めからあきらめていたら、ぜったい成功なんてしないわ。だから、うまくいかないなんて決して考えないことにするわ。この信念を持ち、彼女は人だかりの真ん中へ飛び込んで行った。他の人たちの機先を制してアレクスの前に立つと、手を差し出して、「ジャルキから来たあなたの崇拝者です」と自己紹介した。

レイチェルがふいに現われると、アレクス・ハフティカは少し嬉しそうに応じた。彼は流行のスーツを着て、よく手入れされた口ひげをたくわえ、きれいに櫛目の入った黒髪の魅力的な男であった。明らかに身なりに気を遣っており、自信に満ち溢れ、おそらくは多少は女性経験もある品のよい男であった。周囲の人たちは驚いて黙り込んでしまったが、レイチェルは自分を見つめるアレクスが自分の意図を見抜いていることを知って、嬉しさと恥ずかしさを同時に感じたが、彼が口を開く前にもうすでに自分が彼の気持ちをとらえていることを知っていた。

「これは何と嬉しいことをおっしゃるお方でしょう、お嬢さん。喜んでいつか私の意見を聞いていただきますよ」彼は軽く腰を曲げてお辞儀をし、また先の会話に戻った。レイチェルは気もそぞろに近くのテーブルに退き、そこにいる人たちに加わって自分でお茶を注いだ。

その後アレクスはこっそり自分を見ていることをレイチェルは気づいていたが、その晩は彼女に近づいて来ることはなかった。彼女は次にどんな行動をとろうかと考えていたが、決心がつく前に彼はホールから去って行った。彼がとつぜんいなくなったことに気づいて、レイチェルは彼と再会の約束をしていなかったことを残念に思った。

しかし、機会が失われたわけではなかった。チェンストホーバのユダヤ人社会はそんなに大きくはない。社交クラブは宗教色のないユダヤの青年が集まる場所であったが、カフェ・プリストルはユダヤ人なら誰もが好んで出入りする場所であった。レイチェルがアレクスに再び出会うのは時間の問題にすぎなかった。やがて彼女もアレクスの政治評論を読むようになった。彼は熱烈で説得力のある筆致でその時代の問題を論じた。

「ポーランドに住むユダヤ人にとって、ポーランドは自分たちの祖国である。だからポーランドを攻撃しようとするあらゆる敵に対して我々は戦い、太古より幾多の戦場において血を流してきたのだ。我々の祖先がこの地に来て以来 900 有余年、ポーランドの歴史においてユダヤ民族が誠を尽くして参加してこなかった歴史的な事件はただの 1 件もない。したがって、我々ユダヤ人は独立国ポーランドにおいてはポーランド人と平等な権利を享受すべきである」

レイチェルはこの男のロマンに感動した。今まで私はこのような壮大な人生の目標を持つことなど想像もしていなかった。私もこれからアレクスと同じ経験ができるのだわ。ポーランドをより良い国にしたいという理想、それを実現できるという希望、そのために活動する固い意思を持つ彼は本当のロマンチストよ。そうだわ、希望と活動こそが、ロマンチストと単なる夢想家とを区別し、真の理想主義者と怠惰な不平家とを分ける本質的な要素なのね。

彼女が「ロマン」と行動を結びつけて考えたのは、この時が初めてであった。でも、まず夢がなくては何事も始まらないわ。ヤコブの夢はパレスチナ、アレクスの夢はポーランド、二人ともその夢に向かって突き進む行動力によって支えられているのだわ。その行動を押し進めていく過程にいる時、彼らは最も確信に満ちて輝いているのね。

レイチェルがアレクスと偶然再会したのは、ある晩友だちのワンダと夕食をとっていたカフェ・プリストルであった。長い時間をかけてゆったりとした食事がすんだときは、すでになかなか遅い時間になっていた。レイチェルは銀製のグラス・ホルダーに入れたコップの中で湯気を立てているお茶をすすっていた。銀の取っ手が熱くて、2、3秒ごとに下に置かなくてはならなかった。2人の会話も途切れていた。そこへウェイターがグラスに入れたブランデーを2杯、トレイに載せて持ってきた。

「窓際のテーブルのお客様からでございます」

レイチェルは顔を上げると、アレクスがかなり年配の男性と窓際に座っているのが目に入った。彼はにっこり笑い、彼女に向かって頭を下げた。レイチェルも微笑んでわずかに頭を下げたが、すぐ振り向いて、何事もなかったようにワンダと話し始めた。

レイチェルは丸めた手でブランデー・グラスを持ち、強くて芳しい香りを胸いっぱい吸い込んだ。座ったまま時おり彼の方にちらっと目をやった。彼は話に夢中になっていたが、時々顔を上げると2人の視線が合った。しばらくして彼の話し相手がレストランから出て行くと、アレクスは満席のテーブルの間を通り、人々と挨拶を交わしながらこちらにやって来た。レイチェルとワンダのそばで立ち止まった。

「あなたは私の講演を聞きに来てくださった素敵なお婦人でしたね。ご一緒させていただいてもよろしいか？」

返事も待たずに、彼は隣のテーブルの椅子を引き寄せ、ウェイターに合図して言った。

「レミー・マルタン、お願いします」

これがそれ以後2人の間で長く続く、激しい愛の葛藤の始まりだった。アレクスはレイチェルに英語のレッスンをすることに同意した。

「今度の水曜日にお宅へ伺いますよ」アレクスはワンダを寄宿舎に連れて行ってから、レイチェルをアパートまで送って行く途中で言った。

「だめよ」レイチェルは言った。「うちの家主さんは男の人が来るのは許してくれないから」

「それなら君が私の家に来たらいいよ。来週水曜日、6時、コペルニク通り24番地です。入り

口は横にあります。楽しみにお待ちしております」彼は丁重に言った。

その日、レイチェルはアレクスの家の玄関に着くと、重々しいベルを鳴らしてそわそわしながら待っていた。彼女には長く感じられたが、やがてドアが少し開いて若い女性が顔を出した。レイチェルよりは2、3歳年上で、ブロンドの髪の魅力的な人であった。

「誰にご用ですか？」親しげな態度はまったく示さずに彼女は言った。

「私はレイチェル・ヨニッシュです。ハフティカさんにお会いすることになっているのですが」

「アレクスはここにいません」ドアが閉まりかけた。

「ちょっと待ってください」レイチェルはドアに手をかけて前に進み出た。「ちょっと待って。私はアレクスに英語を教えることになっているのです。彼は私を待っているはずですが」

「私はアレクスの妹ですが、兄はここにはいません。あなたのことは聞いていません。どうか明日兄の事務所の方へ行ってください」今度はドアがしっかり閉められた。

レイチェルは、顔を赤らめ、すごく腹を立てた。屈辱を感じながら、なすすべもなくそこに立っていた。

「まあ！ どうしてこんなひどいことができるの！」レイチェルは地団太踏んで悔しがった。走って家に帰り、彼にはもう会いに行かないと決心した。もし彼が私に会いたいなら、彼が私を追いかけて来るべきよ。私に好意を寄せてくれる男はいくらでもいるわ。

レイチェルは金曜日に週末を過ごすためにジャルキへ帰った。家にいると、外界から隔離されて、まるで泡の中を歩いているような感じがして、彼女の耳に達するすべての物音はくぐもって聞こえた。父が新しく興した事業の問題で悩んでいることは何となくぼんやり感じていたが、レイチェルは自分のことに心奪われて、父のことなどほとんど注意を払うこともなかった。

月曜日の夜、彼女はプリストルへ出かけた。レストランの裏口に通じる通路を示す、真ちゅうの手すり近くのテーブルに、アレクスが1人で座っていた。レイチェルの心臓は激しく打っていたが、彼には目もくれずテーブルを通り過ぎようとした。

「レイチェル」と言って彼は彼女の手首をつかんだ。「先週はすまなかった。エラは君が来ることを知らなかったし、私も遅れたのだ。次の晩ここで君を捜したよ」

「妹さんに話しておくべきだったわね。私がお宅へお邪魔することになっているなら、家族にもそのように伝えてあると思うわよ。快く迎えてもらえるもの思ってたわ」彼女は怒りをあらわにして言った。

「ほんとうに？私は家族のことまで考えていなかったよ」アレクスは眉を吊り上げ驚いたように言った。

レイチェルは顔を赤らめた。「ええ、もちろんそんな必要はありませんが。私の方が少し考え過ぎでした」

「どうぞ、掛けてください」彼はやさしく彼女の手を引っ張った。「本当に申し訳ないと思っていますよ。もう一度やり直しましょう。水曜日の夜に来てください。今度はとびっきりおもてなし

をしますよ——英語のレッスンの他にね」

彼女は手すりを回って、アレクスと向き合う席に座った。

「それじゃあなたがおっしゃるように、もう一度やり直してみるわ。でも、あなたの家には行きません。あなたが私のアパートに来るのを許してもらうように、家主さんに頼んでみます。もし許してくれなかったら、アパートを出て行くわ」

水曜日の夜、アレクスは約束通り彼女のアパートへやって来た。英語のレッスンの後、彼女がお茶を入れるのを待って、もっと個人的な話もした。

「覚えなくてはならないのは、フランス語ですよ」とアレクスは言った。「教養のある人たちはみんなフランス語を話します。あなたがワルシャワに住みたいと思うなら、フランス語を知っている必要がありますよ」

「それより、まず英語でしょう？」レイチェルは笑いながら言った。

「あなたは自分のことをあまり真剣に考えていませんね。自分の人生をどのように生きていくつもりですか？英語を勉強して、それから何をすることもですか？」

「それはどういう意味？私は今でも父の経営している会社を手伝っていますよ。そのうちに、おそらくワルシャワへ出て行きます。そしていつかはイギリスへ行きたいと思っています。旅行もしたいし、結婚もしたいわ——もちろん私にふさわしい人とね。偉い人たちをいつも家にお招きしたいの」

「それは何のために？どんな目的があるのですか？それを考えなくてははいけませんよ、レイチェル。しかしあなたはまず教養を身につけることですよ。英語だけでは十分じゃありません。あなたが読まなくてはならない本のリストを作ってあげましょう。もしあなたが『お偉がた』を招待したいのなら、そういう人たちと話す話題がなくてはなりませんからね」と言って彼は微笑んだ。

生きる目的、人生の目標——これは男の言葉だわ、とレイチェルは考えた。私は自分を、目標を追い求めて世界を駆け巡る人間とは決して思っていないわ。私は、しっかりと腰を据えて自分の根拠地に踏みとどまっていることから自分の力が出てくると思っているから。

その当時の母の写真が今も残っている——19か20歳のとき、チェンストホーバで撮ったセピア色の写真を大きく引き伸ばしたもので、金ぴかの額縁に収められ、肖像画のように居間に掛かっている。その時の母は何を望んでいたのだろうか？何かを内に秘めたような目つきで私を見ている母は、顔の滑らかな輪郭の線に髪の毛の房が垂れかかり、高い頬骨、完璧に調和のとれた鼻とわずかに開いた唇は野性的な美しさを湛えているように見える。長い首筋は、黒いドレスの肩の線を際立たせて、下あごまでせり上がっている。情熱的な黒い瞳は、官能的で思い詰めたような感情を秘め、あごは誇らしげに突き出ている。しかし、美しさ以上に興味を引くのは、人生への期待に満ち、何かを掴み取ろうとする強い熱意に溢れた彼女の表情である。とは言うても、母の生涯を貫いていた2つの相反する衝動——一方では保護されたいという願望と、他方では自由と独立を得たいという願い——に彼女が駆り

立てられているようには見えない。彼女はいつからこの一風変わった男性と結婚することを思い始めたのであろうか？アレクスは妻を格別郑重に扱う男であり、弁護士であり、おそらくは著名な医者であり、出版業者であり、成功した実業家でもあった。当面する世界の諸問題に取り組んでいる彼の姿に惹かれて、彼女は自分の魅力に磨きをかけることを怠らなかった。しかし、それはこの写真を撮った当時のことではないだろう。この男性との結婚が、彼女の願っている人生に道を開き、その人生に甘んじてよいとはまだ思っていなかったからだ。

(続く)

訳注

- (1) マフ 防寒具として両手につける円筒状の毛皮